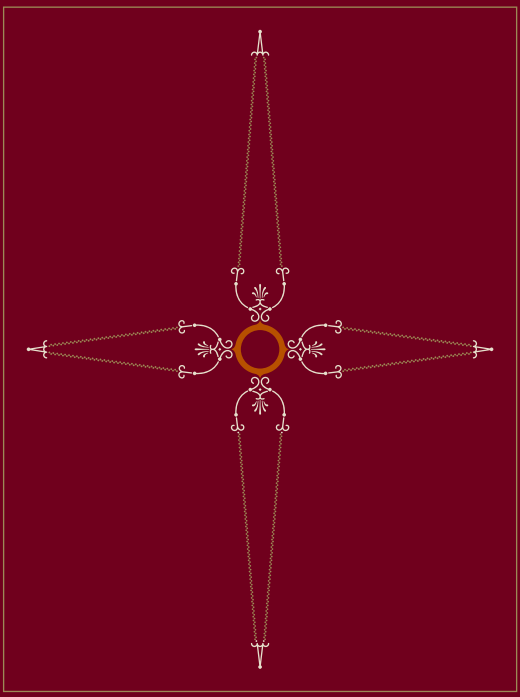
ポンペイ遺跡ガイド



POMPEII

ポンペイ文化財保護局

Unione Europea

Fondo Europeo di Sviluppo Regionale
investiamo nel vostro futuro

MINISTERO
DEI BENI E
DELLE ATTIVITÀ
CULTURALI E
DEL TURISMO

P.O.In.
ATTRATTORI CULTURALI
NATURALI E TURISMO

© 2015年

ポンペイ文化財保護局

このガイドブックには、遺跡内の主要な見学場所に関する簡潔な紹介が記されています。本書に記載されている場所でも、一時的に閉鎖されている場合があります。

ポンペイ文化財保護局の許可なく、このガイドブックを配布することは禁じられています。

ポンペイ遺跡ガイド

POMPEII

ポンペイ文化財保護局

目次

古代ポンペイの町と遺跡の概説 8

ポンペイ遺跡の全体地図 10

Regio I 12
1 チェトラ奏者の家 14
2 カスカ・ロングスまたは演劇モチーフの小絵画の家 . 15
3 ステファヌスのフロニカ 16
4 アキレスのラル神の家 17
5 クリプトポルティコの家 18
6 チェイイの家 19
7 メナンドロの家 20
8 パクイウス・プロクルスの家 21
9 エフェボの家 22
10 ヴェトゥティウス・プラキドゥスの家とテルモポリウム . 23
11 果樹園または草花装飾の寝室の家 24
12 船エウロパ号の家 25
13 剣闘士のオステリア 26
14 フッジャスキの菜園 27

Regio II 28
1 オクタヴィウス・クアルティオの家 30
2 貝のヴィーナスの家 31
3 ジュリア・フェリーチェのプラエディア 32
4 フォロ・ボアーリオ 33
5 円形劇場 34
6 大運動場 35
7 開放されたトリクリニオあるいは夏の家 36
8 エルコレの庭園の家 37
9 ノチェーラ門と外周壁 38
10 ノチェーラ門のネクロポリス 39

Regio III 40
1 トレビオ・ヴァレンテの家 42
2 モラリストの家 43
3 ノーラ門と外周壁 44
4 ノーラ門のネクロポリス 45

Regio V 46
1 剣闘士の兵舎 48
2 マルコ・ルクレツィオ・フロントーネの家 49
3 銀婚式の家 50
4 チェチリオ・ジョコンドの家 51
5 ヴェスヴィオ 門の ネクロポリス 52

Regio VI 54
1 ファウノの家 56
2 アンカーの家 57
3 小さな噴水の家 58
4 悲劇詩人の家 59
5 テルモポリウム 60
6 パンサの家 61
7 パン焼き釜の家 62
8 サルスティオの家 63
9 傷ついたアドニスの家 64
10 ディオスクーリの家 65
11 ヴェッティの家 66
12 黄金のキューピッドの家 67
13 アラ・マッシマの家 68
14 カステッルム・アクアエ 69
15 ナポリ王子の家 70
16 メレアグロの家 71
17 アポロの家 72
18 外科医の家 73
19 エルコレ門と外壁 74
20 エルコレ門のネクロポリス 75
21 ディオメデスのヴィラ 76
22 秘儀荘 77

Regio VII 78
1 郊外の浴場. 80
2 マリーナ門と外壁 81
3 船員の家. 82
4 アポロンの聖域 83
5 フォロ. 84
6 ポンデラリアの食堂 85
7 フォロの穀物倉 86
8 ジュピターの神殿 87
9 名誉のアーチ 88
10 フォロの浴場. 89
11 フォルトゥーナ・アウグスタの神殿 90
12 マチェルム 91
13 公共のラル神 92
14 アウグストゥスの守護神の神殿(ヴェスパシアヌスの神殿) . 93
15 アウグストゥスの調和の回廊(エウマキアの建物) . . . 94
16 スタビアの浴場 95
17 シリクスの家 96
18 ルパナーレ(遊郭) 97
19 ポピディウス・プリスクスのパン屋 98
20 古代の狩りの家 99
21 マルコ・ファビオ・ルフォと黄金の腕輪の家 100

Regio VIII 102
1 ヴィーナスの聖域 104
2 バジリカ 105
3 コミティウムと市庁舎 106
4 シャンピオネの家 107
5 幾何学模様のモザイクの家 108
6 赤い壁の家 109
7 三角のフォロ 110
8 ドリス式神殿-アテナとエルコレの聖域 111
9 サンニウム人の体育場 112
10 大劇場 113
11 劇場のクアドリポルティコまたは剣闘士の兵舎 . . . 114
12 小劇場-オデイオン 115
13 エスクラピウスまたはメイリキオのジュピターの神殿 116
14 イシス神殿 117
15 コルネリイイの家 118

Regio IX 102
1 スタビアナ通りのマルコ・ルクレツィオの家 122
2 中央の浴場 123
3 オベリオ・フィルモの家 124
4 ジュリオ・ポリビオの家 125
5 貞節な愛人のインスラ 126

用語解説 128

アルファベット順索引 134

ポンペイ遺跡見学のルール 141

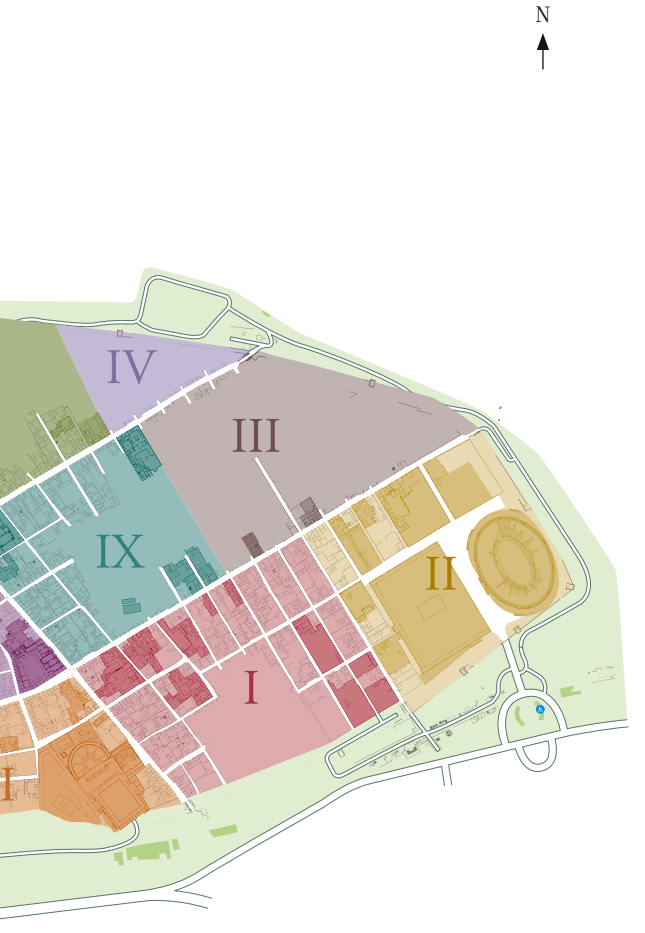
古代ポンペイの町と遺跡の概説

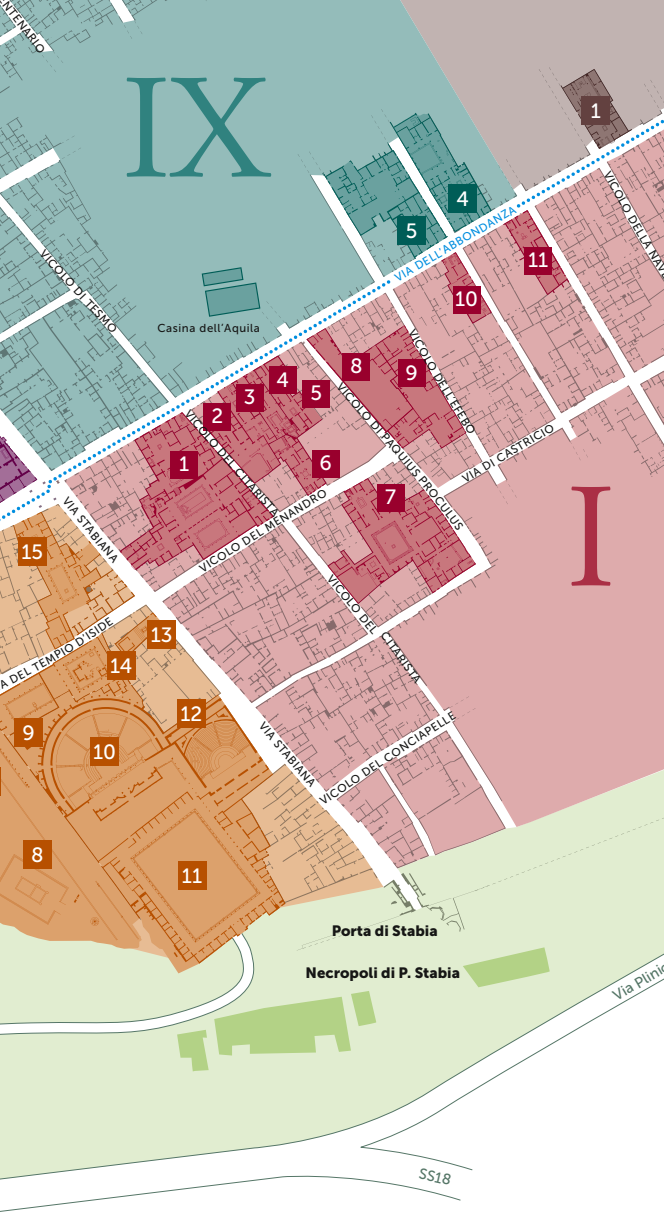
ポンペイの町は海抜およそ□□m、ヴェスヴィオ火山から流れ出た溶岩の上に造られ、栄えた港を河口に持つサルノ川の谷を見下ろす位置にありました。町の起源については正確な記録が残っていません。最も古い記録は、紀元前7世紀の終わりから6世紀前半にかけて、およそ63,5ヘクタールに及んだ町の周囲を巡る、凝灰岩製の最初の防壁“パッパモンテ”が造成された際のものです。
その当時のポンペイは先住民、エトルリア人、ギリシア人が混在する町で、その後も発展を続け、石灰岩を用い要塞を備えたギリシア式の防壁が新たに建設されました(紀元前5世紀)。
紀元前5世紀の終盤にイルピニアやサンニウム山地から南下してきたサンニウム族が、現在のカンパーニア平野(肥沃な平野の意)に定住し、ヴェスヴィオ周辺と海岸沿いの町を征服してヌチェリア(ノチェーラ)を首都とする同盟に組み入れました。
サンニウム時代にポンペイは顕著な都市化を見、紀元前4世紀にはすでにあった防壁と同じルートで、新たな石灰岩製の要塞壁がサルノ川に沿って建造されました。 紀元前4世紀の終わり頃になると、サンニウム人の活動で政治的な動揺が生じ、ローマはイタリア南部への介入を余儀なくされ、同盟の推進と軍隊の導入によって、次第にカンパーニア地方全域を手中に収めました(紀元前343－290)。ポンペイはローマ共和国の政治同盟に加わりましたが、紀元前90－89年には周辺の他の都市と共に、ローマに対して社会的‐政治的な平等を望んで反抗しました。しかしポンペイはルキウス・コルネリウス・スッラの軍隊によって包囲されて降伏を余儀なくされ、コルネリア・ヴェネリア・ポンペイアノルムという名のローマの植民都市となりました(紀元前80年)。
植民都市となってから、ポンペイには様々な公的資的な建物が造られ、とりわけ初代皇帝オクタヴィアヌス・アウグストゥス(紀元前27‐紀元14年)と ティベリウス帝(紀元14‐37年)の治世には大規模な美化が実現されました。紀元62年にはヴェスヴィオ周辺の一帯に大きな地震の被害が生じました。ポンペイではすぐに復興作業が開始

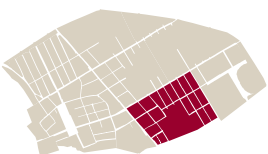
されましたが、被害規模の大きさと地震による人々の流入で、再興には長い時間を要しました。17年後の紀元79年8月24日、ヴェスヴィオ火山の突然の噴火によって、ポンペイの町が灰と火山歴に埋もれた時、まだ町のあちらこちらには復興工事中の現場が残っていました。ポンペイの町は16世紀の終わりに再発見されましたが、ナポリ王であったブルボン家のカルロ3世の命によって発掘が始まったのは[illegible]年のことでした。その後1800年代を通じて継続的に作業が続けられ、近年の作業では都市ポンペイとその建築、彫刻、絵画、モザイクの素晴らしい宝の発掘、修復、再評価に至っています。ポンペイ遺跡はおよそ66ヘクタールの広さに及び、そのうち約44ヘクタールがこれまでに発掘されています。
レジオネス(区域)とインスラエ(ブロック)による町の分割はジュゼッペ・フィオレッリによるもので、研究と方向付けを容易にするために1858年に割り振られました。
家の所有者の名前が明らかでない場合には、発掘者によって、それぞれの発掘品の特徴や周囲の状況に即して家の名前が付けられています。

ポンペイ遺跡の全体地図

以下に続くページでは、用語解説に収められた専門用語が星印(*)で示されています。


N
IV
III
IX
II
I


IX
I
VIA DELL'ABBONDANZA
VICOLO DI TESMO
Casina dell'Aquila
VICOLO DELLA NAV
VICOLO DELL'ELEFEBO
VICOLO DI PAQUIUS PROCULUS
VICOLO DEL CITARISTA
VICOLO DEL MENANDRO
VIA DI CASTRICIO
VIA STABIANA
VICOLO DEL TEMPIO D'ISIDE
VICOLO DEL CONCIAPELLI
Porta di Stabia
Necropoli di P. Stabia
Via Plinio
SS18



Regio I

1 チェトラ奏者の家 14
2 カスカ・ロングスの家または演劇モチーフの絵画の家 . . 15
3 ステファヌスのフロニカ 16
4 アキレスのラル神の家. 17
5 クリプトポルティコの家 18
6 チェイイの家. 19
7 メナンドロの家. 20
8 パクイウス・プロクルスの家 21
9 エフェボの家. 22
10 ヴェトゥティウス・プラシドゥスの家とテルモポリウム . 23
11 果樹園または花装飾のある寝室の家. 24
12 船エウロパの家 25
13 剣闘士の宿屋 26
14 逃げる人々の農園. 27

チェトラ奏者の家

ドムス・ポピディ
セクンディ・アウグスタニ

2700平方メートルに及ぶ広さのこの家は、ポンペイで最も大きな家の一つで、もとは所有者が異なっていた幾つかの建物を統合して造られ、ほとんど1ブロックを占めています。そのため、建物の平面図は変則的で、2つのアトリウムと3つのペリスティリウムが含まれ、豪華で壮麗な部分を構成しています。中央のペリスティリウムには池があって、その周りには2匹の犬に襲われるイノシシ、ライオン、鹿、蛇のブロンズ彫刻が置かれていました。これらの彫刻の口からは水があふれ出て、ヴェスヴィオ地方のヴィラの中でも最も豊かな、流行の装飾を誇っていました。
この家が現在みられる規模に達したのは紀元1世紀のことで、家の名前はここで発見されたチェトラを弾くアポロのブロンズ像に因んで付けられています。家の中から発見された碑文や選挙に関する記述が示すように、所有者はポンペイでも最有力の家柄ポピディ一族に属していました。
発掘時期：1853-1861; 1872; 1929; 1933.

カスカ・ロングス
または演劇モチーフの小絵画の家

建物全体は紀元前2世紀に建てられた、隣接する二つの家を統合したもので、今日メインのアトリウムと付属のアトリウムにそれを見ることができます。メインのアトリウムの壁画は「メナンドロの悲劇」の演劇場面を描いたもので、アウグスティヌス時代にそれ以前の壁画に代わって制作され、高い水準の作品となっています。
空間全体が非常に洗練され、インプルヴィオ* は有色の大理石で覆われ、雨水を流すコンプルヴィオ* は完璧に復元されてテラコッタの水切りで装飾されています。インプルヴィオの片側には、獅子の脚を形どった大理石の三脚で支えられた特徴のある石板が見られ、もとの所有者で、紀元前44年にシーザーを暗殺したグループに加わってたプブリウス・セルヴィリウス・カスカ・ロングスの名が刻まれています。シーザーの暗殺者から剥奪されたこの価値ある品は、その後貴重品の収集家であったこの家の持ち主の見事な調度品に加えられました。他にも銀製の皿やアトリウムにあった戸棚から、ブロンズ製の小彫刻などが見つかり、主のコレクション好きを物語っています。
発掘時期：1912; 1926-1927.

ステファヌスのフロニカ

この家は紡いだ糸の油抜きや汚れた衣類や布の洗濯をする作業場として使われ、もとはアトリウム形式だった家を改造してポンペイ最後の時期に改造されたものです。アトリウムの中央には、本来インプルヴィオがあるべき位置に大きな貯水槽が置かれ、コンプルヴィオがあった場所には明り取りの開口部が作られて、テラスの上階部分は布地を乾す場所に改造されています。その他の水槽は家の後ろ側にある庭に置かれていました。発掘によってフロニカ(洗濯場)の全貌が現れた際に、入り口近くでまとまった貨幣と共に一体の人骨が発見されました。フロニカの所有者で、選挙人登録から明らかなステファヌスのものと推測され、最後の売り上げをもって逃げようとしたものの、紀元79年の噴火で命を失いました。ステファヌスの使用人はほとんどすべて奴隷の身分で、動物や人間の尿を含んだ液に付けた布地を何時間も足で踏み続けるのが仕事でした。道路に沿って液体の入った壺が並んでいました。
発掘時期：1912-1913.

アキレスのラル神の家

屋内には、文学作品に想を得た、豊かで洗練された絵画装飾が残っています。家の名はアトリウムに向かって開放された空間に残ったスタッコ細工に由来し、おそらくは礼拝所として用いられたものでトロイ戦争のシーンを描いています。クリプトポルティコの家(参照ページ18)の装飾に共通するこのテーマには、この家の主がローマの歴史に関連させながら、自らの家系の由来を明らかにしようとする狙いがあったものと思われます。庭に面した空間の一つには大きなフレスコ画が残り、ヴィーナスの聖なる木であるギンバイカの枝で巨大な像を誘導するキューピッドたちが描かれています。女神ヴィーナスの力を、巧みな比喩を用いて賛美した画面です。
発掘時期：1911-1929.

クリプトポルティコの家

洗練された壁画で装飾されたこの家は、およそ3世紀の間所有者が交代する度に、扉や通路を閉鎖することによって、隣に建つアキレスのラル神の家(参照ページ17)と何度も一つにされたり切り離されたりしてきました。中庭の奥のラル神を祀る一角には二つの階段があって、それぞれ別の階へと導いています。上っていく階段は饗宴に使われたトリクリニオとロッジャの下にある台所へと通じ、噴火で死んだ人の石膏型が展示されています。下りの階段はこの家の名にある、屋根で覆われた広い廊下、クリプトポルティコへと通じています。廊下にはサテュロスとマイナデスのフレスコ画の他、一巻の絵物語のように描かれたトロイ戦争をテーマとしたフリーズ装飾が残っています。当時はヴェルギリウスの叙事詩「アエネイス」が刊行され後で、トロイ戦争は流行のテーマとなっていました。ヴォールトには花冠や草花のモチーフ、幾何学模様などのスタッコ仕上げが施されています。噴火前の最後の時期には、この空間は葡萄酒の貯蔵庫として使われていました。階段の向かいには浴場施設が造られ、ポンペイで発見された数少ないプライベートな浴場の一つです。今日でもスタッコ装飾の残る4つの異なった浴室を見ることができます。
発掘時期：1911-1929.

チェイイの家

白いスタッコパネルと、扉脇の二本の側柱の上に載った立方体の柱頭が特徴的な、簡素な正面を持つこの家は、サンニウム時代後期(紀元前2世紀)の古代住居の例として非常に価値があります。中へ入ると、アンフォラの破片を用いて作られたインプルヴィオが目に入ります。この手法はギリシアで普及していたもので、ポンペイでは他にも「古代の狩りの家」に例を見ることができます。小さな庭の最奥には野生動物を描いた壁面が残っています。これは当時、屋外の空間の装飾に好んで使われたテーマでした。側面の壁にはナイルデルタの動物を配したエジプト的な風景が描かれ、おそらくこの家の主はイシス神の信者であったと思われます。ポンペイ最後のこの時期、イシス信仰はかなり盛んでした。
家の正面に記された選挙登録によれば、この家は行政官ルキウス・ケイウス・セクンドゥスの所有によるものでした。
発掘時期：1913-1914.

メナンドロの家

この大きな建物は建築学的に複雑な変遷を経ていて、身分の高い一族の典型的な住居の好例です。
アトリウムには「イリアス」と「オデュッセイア」の場面が描かれています。
ペリスティリウムはロードス式で、北側の部分が他より高くなっています。家の名前は、ポルティコに飾られていたアテネの喜劇作家メナンドロの肖像に由来しています。
この家には小さなテルメ施設があり、その下にはおそらくは貯蔵室であったかと思われる地下室があって、そこから118もの銀製品が納められた箱が見つかりました。発見された品々は現在ナポリの国立考古学博物館に収蔵されています。この宝は修復工事の前に隠されたもので、家族の食事のサービスに使用された銀器でした。これらの食器の中には葡萄酒用のピッチャーも含まれていましたが、饗宴用の杯や皿が主なものでした。南側には仕上げの施されていない空間があって、復元された馬車が展示されています。
この家はポッペイ一族のクイント・ポッペオ・サビーノの所有によるもので、ネロ帝の2番目の妃ポッペア・サビーナの親戚でした。
発掘時期：1928; 1930; 1932.

パクイウス・プロクルスの家

入口の扉に見られる立方体の柱頭から明らかなように、最初の住居はサンニウム時代(紀元前2世紀)に造られたもので、床面には半閉じの扉の前に座る鎖でつながれた犬のモザイクが残されています。帝政ローマでは犬は家の守りのシンボルとされていたことから、このモザイクはその時代のものとされています。アトリウムはモザイクで覆われ、繁栄を引喩する多色使いの動物たちが大きな角に仕切られた空間に配置され、更に男女二人の人物が配されています。他にも、ペリスティリウムに開かれた居住空間に見られる高価な大理石を組み込んだ床や、床の中央に配された細かい多色の小片で描かれた繊細なモザイク画は、極めて高度な装飾技法によるものです。トリクリニオにはその当時ポンペイで活躍していたアトリエが手掛けた作品があって、六人の小人が滑稽な漁をしている場面が描かれています。もう一つの作品は現在ナポリの国立考古学博物館に展示され、酩酊したシレノスの下敷きになるロバの場面が描かれています。家の正面に描かれた多くの選挙掲示物から、この家の所有者はプブリウス・パクイウス・プロクルスか、或いはカイウス・クスピウス・パンサであると思われます。
発掘時期：1911; 1912; 1923-1926.

エフェボの家

典型的な中流階級の商人の住まいで、紀元1世紀の終わりには交易によって裕福になり、複数の家を統合し改装されています。この家で最も豪奢な部分は庭の周囲で、回廊で囲まれ、大きなトリクリニオに面しています。トリクリニオの床の中央にはオプス・セクティレと呼ばれる大理石製の、バラと蓮の花をモチーフにした嵌め込み模様が施され、ポンペイの遺跡では唯一の例となっています。庭園内にはマルスとヴィーナスを描いた大きな装飾の残る小礼拝所が残っています。また、もともとは庭園に置かれ、噴火起きた時には、以前から続いていた復興工事で傷むのを恐れて他の場所に保管されていた一連の彫像もあります。その中でもとりわけ優れているのが、ブロンズ製のエフェボの像で、紀元前5世紀のギリシア彫刻のテーマを再現した作品です。家の名前の由来となったこの像は燭台の機能を果たし、現在はナポリの国立考古学博物館に展示されています。
この家の所有者はプブリウス・コルネリウス・タゲスと思われ、近くで発見された選挙登録の名前と、家の中にあったアンフォラに記された名前から、おそらくは葡萄酒の商人だったと推測されます。
発掘時期：1912; 1925.

ヴェトゥティウス・プラキドゥスの家とテルモポリウム

ヴェトゥティウス・プラチドゥスのテルモポリウム(ギリシア語から派生したラテン語)はアッボンダンツァ通りに面し、かつては土地所有者層だけに限られていた社会的な地位を、ローマ時代のポンペイでは商人や職人たちも享受していたことを示す良い例と言えます。名前が示すように、この建物では豊かな装飾のあるレンガ造りのカウンターに大きなかめの下半分を陥れることができるようになっていて、その中に保存された温かい食べ物と飲み物を提供していました。興味深いのは奥の壁にあるニッチで、家の神々(ラル神)、オーナーの守護神ジェニオ、商いの神(メルクリオ)、酒の神(デュオニソス)を祀った祭壇がよく保存されています。仕事場に直接通じている建物の後方には、見事なフレスコ画で装飾された住居と屋外での饗宴に用いられたトリクリニオが残っています。
台に嵌めたままの形で残されたテラコッタ製のかめの一つからは、最後の日の売上金と思われる重さ3キロ近くものたくさんの貨幣が見つかり、オステリアの商いがどれほど繁盛していたかが想像できます。
発掘時期: 1912; 1939.

果樹園または草花装飾の寝室の家

この家のアトリウムは後方に緑の空間を持つ設計で、ポンペイでも最も美しい庭園画が保存されています。ポンペイに残る他の建築例では、庭園画は客用の広間など公けの空間に限られていたのに対し、この家ではプライベートな部分、二つの小さな寝室の壁に描かれています。この庭園画にはエジプトのイシス神に関連するモチーフが組み込まれていて、家の主がこの女神の信奉者であったことを想像させます。
二つの寝室のうち、最初の部屋には観賞用の植物と果樹が描かれ、レモンやセイヨウヤマモモなど、その種類が分かるほど正確に描写されています。二つ目の部屋には大きさの異なる3本の木が描かれ、中でも中央のひときわ大きい木はイチジクで、繁栄のシンボルである蛇が住む木とされていました。
発掘時期：1913; 1951.

船エウロパ号の家

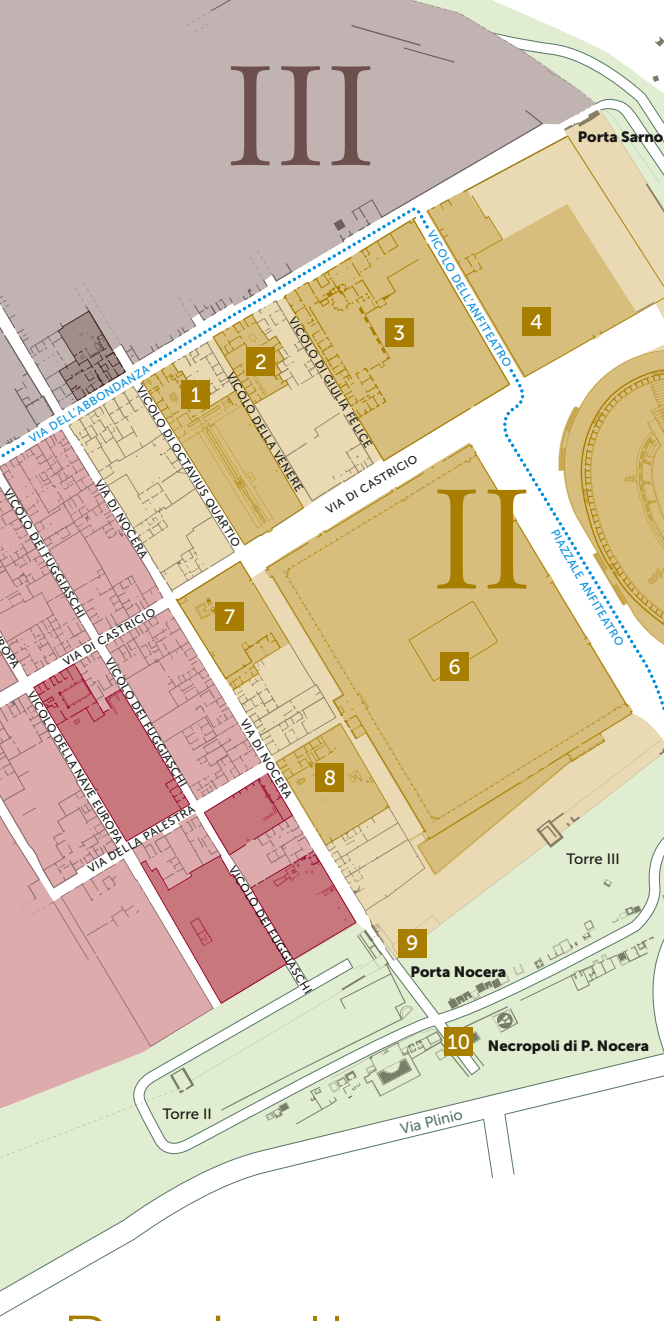
またステファヌスのフロニカ(参照ページ16)やパン焼き竈の家(参照ページ62)のように、この家もかつて住宅であったものを製造業や商い向けに手直しされ、ここでは農業向けに改造されています。広い庭にはソラマメ、玉ねぎ、キャベツそして果樹が植えられていました。部屋の一つは家畜の飼料を保管する場所として使われていました。ペリスティリウムの円柱や幾つかの空間に残された壁面装飾、とりわけ現在の入り口の左手にある部屋の装飾からは、もともとの家の壮麗さと社会的地位の高さを証明しています。有色スタッコを使用して石壁を模した仕上げの他、壁面上部の半円柱はとりわけ見事で、紀元前3から2世紀のギリシアの装飾を直接取り入れたもので、ポンペイでは珍しい一例です。
家に付けられた名前は、ペリスティリウムの北面の壁に刻まれた掻き絵に由来しています。掻き絵には「エウロパ」という名の貨物船と、それを取り巻く小さな船が描かれています。
発掘時期：1951-1961; 1972-1973; 1975.

剣闘士のオステリア

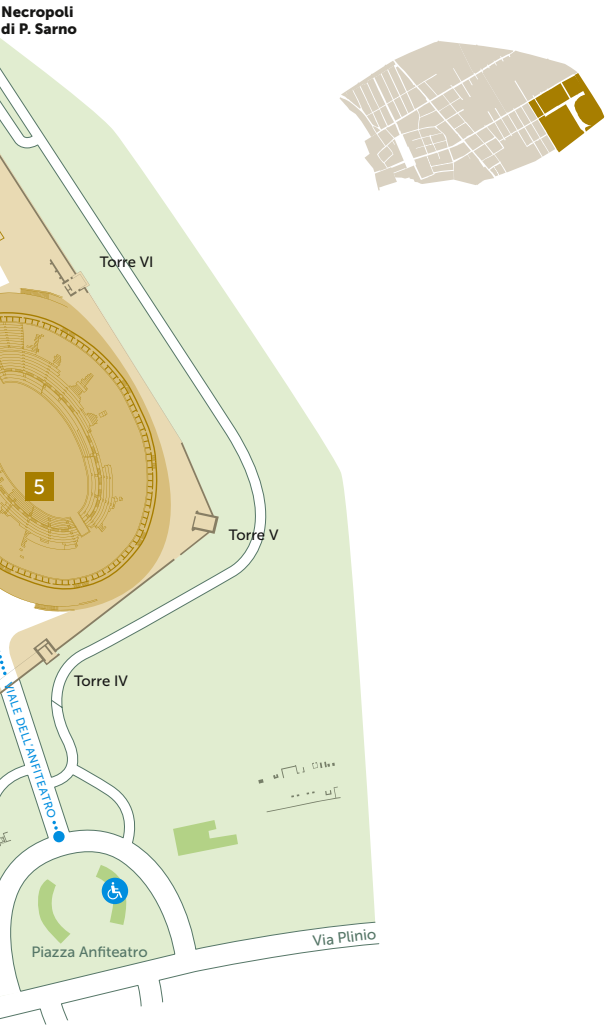
紀元62年の地震の後、幾つかの家を壊したり修復したりしてできたこの建物はノチェーラ通りに面しています。入口は、屋根の付いたワインの貯蔵庫、ブドウ踏みの部屋、ペルゴラで覆われた夏用のトリクリニオへと通じています。
他の空間には小さな壺やランプを製造するための窯が作られました。
現在は出土品収蔵館に展示されている小さな凝灰岩製の剣闘士の像がこの家の名の由来で、近くの円形劇場で競技が行われる際には剣闘士たちがここを利用していました。
2005年には、噴火当時の記録に従って、新たにブドウの木が植樹されました。発掘時期：1954-1955; 1958-1959.

フッジャスキの菜園

以前は住宅が立ち並んでいたこの空間は、噴火の数年前にブドウ畑に作り替えられ、夏の饗宴のためにペルゴラの付いたトリクリニオも建てられました。
囲いの中では幾つかの異なった場所から大人と子供総数13体が確認され、ノチェーラ門から外へ逃れようとして、その時すでに3,5mも積もっていた軽石層の上を走っていて死に遭遇しました。熱い火山弾が追い打ちをかけ、逃げようとした人々を高熱と呼吸障害で死に至らせました。
13体の遺体の石膏型は現在、菜園奥の壁近くで、保護用ケースの中に展示されています。
発掘時期：1961-1962; 1973-1974.


III
Porta Sarno
VICOLO DELL'ANFITEATRO
VIA DELL'ABBONDANZA
VICOLO DI GIULIA FELICE
VICOLO DELLA VENERE
VICOLO DI OCTAVIUS QUARTIO
VIA DI CASTRICIO
II
PIAZZALE ANFITEATRO
VIA DI NOCERA
VICOLO DEI FUGGIASCHI
VICOLO DELLA NAVE EUROPA
VIA DELLA PALESTRA
1
2
3
4
6
7
8
9
10
Torre III
Porta Nocera
Necropoli di P. Nocera
Torre II
Via Plinio

Regio II



1 オクタヴィウス・クアルティオの家 30
2 貝のヴィーナスの家 31
3 ジュリア・フェリーチェ のプラエディア 32
4 フォロ・ボアーリオ 33
5 円形劇場. 34
6 大運動場. 35
7 開放された、あるいは夏のトリクリニオの家. 36
8 エルコレの庭園の家. 37
9 ノチェーラ門と外周壁 38
10 ノチェーラ門のネクロポリス. 39

オクタヴィウス・クアルティオの家

この家は、当時町の外の田舎に点在していた貴族階級の壮大な館の“ミニチュア版”で、噴火の直前にはポンペイのエリート階級の人物の住まいでした。入口の部分には一部に伝統的なアトリウムを備えたオリジナルな空間が残っているのに対し、庭園は二つの高さの違うエリアに分けられ、それらを繋ぐように2本の水の流れ(エウリポ)が造られて、小さな滝や噴水が設えられていました。注目したいのはエジプトと女神イシスからの着想で、壁面装飾や多くの大理石像の他、庭園の建築にも反映されています。
2本のエウリポの高い方の末端には二つの空間が面しています。西側にはイシス神に捧げられた小さな礼拝所、東側には野外での食事用にダブルの寝台(ビクリニオ)が一台と神話をテーマにしたフレスコ画で飾られた洞窟を模したニッチが置かれていました。絵画の作者はルチウスという人物で、作品にサインを残しています。家の主は印章が物語るとおり、デチムス・オクタヴィウス・クアルティオで、諸皇帝を祭るアウグスターリの祭祀の組織メンバーの一人でした。この家はまたロレイオ・ティブルティーノの家としても知られています。
発掘時期：1916; 1918; 1921; 1933-1935; 1973.

貝のヴィーナスの家

紀元前1世紀に建てられましたが、内部はその後大きく改装されました。ヴェッティの家(参照ページ66)と同様、この家でもタブリーノはペリスティリウムのある庭園のために犠牲にされ、ペリスティリウムが家の顔として使用され、その周囲をフレスコ画のある幾つもの空間が取り囲んでいました。その中でもオエウスはメナンドロの家(参照ページ20)のものに次ぐ大きさを誇っています。
ペリスティリウムの奥の壁には、ヴィーナスの大きな舞台装飾のようなフレスコ画が残り、この家に名を与えています。柵(格子?)を超えた向うの低い部分には、エキゾチックな動植物を配した豊かな庭園が描かれています。一方壁の上部は三つの異なった場面に分かれています。右側の場面は鳥が水を飲む噴水、左には台座の上に立つ盾と槍を持ったマルスが描かれています。中央の画面には、ポンペイの守護神で、エロチシズムの女神でもあるヴィーナスが二人のキューピッドに伴われて会の中に身を横たえたシーンが描かれています。
女神は頭に帯状の髪飾りを載せ、首と手首、足首に付けた宝石の他は、完全に裸身の姿です。この家の所有者はサトリィ一族の傍系に当たり、噴火前の時期ポンペイではよく知られた人物でした。
発掘時期: 1933-1935; 1951-1953.

ジュリア・フェリーチェのプラエディア

ジュリア・フェリーチェの所有したこの大きな建築集合体は、紀元前1世紀の終わり頃、それまでにあった複数の建物を統合して造られました。改装の際には“都市の邸宅”として設計しなおされ、緑の空間を多く備えていました。建物全体は4つの空間に仕切られ、それぞれが独立した入り口を持っていました。アトリウム形式の家で、大きな庭園があり、その周囲には居住空間やテルメ施設、広大な庭が配置されています。
ジュリア・フェリーチェの名は紀元62年の大地震の後で建物の正面に書き込まれた、家の所有者を明記する記録から明らかで、この書き込みは現在ナポリの国立考古学博物館で見ることができます。建物内部の多くの空間の装飾は、その当時に手が入れられたもので、中でも夏のトリクリニオは、寝台の周りを洞窟風な設えが取り囲み、大理石の柱が並ぶ回廊に向かって開放されています。庭園にはエウリポが利用されて水と神聖な空間を形成し、一方見事な装飾のテルメ部分には、基本的な施設がすべて備わっていました。この家は遺跡の中でも最初に発掘されたものの一つです。
発掘時期：1754-1757; 1912; 1933-1934;
埋め戻され新たに発掘された時期 1951-1952.

フォロ・ボアーリオ

この広い一区画は、1800年代に行われた最初の発掘の際に、沢山の牛の骨が見つかったことから家畜を売買した市場フォロ・ボアーリオの後ではないかとされました。しかしその後の考古学的な調査によってヴィティス・コンプルヴィアータと呼ばれる方法による大規模なブドウ畑であったことが確認されています。これは古代の文献にある方法で、ブドウの枝を高い位置から低い方へと四方に誘引して房を付けさせるやり方でした。
入口の扉の脇には二つの壁造りのトリクリニオがあって、近くの円形劇場で興行がある時には常連たちで賑わいました。さらにもう一つのトリクリニオが区画の北東の角に残っています。ここには圧搾機と土に埋まったテラコッタ製の大きな10個の容器が残っています。これらの容器は収穫したブドウを絞った液を保存するために使われ、と推定されます。
現在では、その当時と同じ種類のブドウの木を試験的に栽培しています。
発掘時期：1813-1814; 1933-1935; 1954-1955; 1968-1972.

円形劇場

この円形劇場は、古代ローマ世界で知られたもののうちで最古の劇場です。紀元前70年、ポンペイがローマの植民都市となってから間もなく、行政官であったカイウス・クインクトス・ヴァルガスとマルクス・ポルシウスの発意により、オデイオン(参照ページ.32)と共に建てられたものです。
劇場にはポンペイの住人だけでなく周辺の沿岸地域からやってくる観客2万人を収容することができました。劇場の建物は町の中心を外れた位置に建てられ、大勢の観客の移動を容易にするよう工夫されていました。
外部に取り付けられた二重の階段によって上層の階へ行けるように設計され、一方下りのスロープによって下層階への移動ができるようになっていました。アレーナは剣闘士を描いたフレスコ画で飾られた手すりによって観客席と仕切られ、客席の上部には階段席を作らせた行政官たちの名前を今日でも読み取ることができます。
紀元59年には熱狂したポンペイとノチェーラの観客の間で流血の喧嘩が起こりました。
この暴動騒ぎの後、ローマの元老院はポンペイの円形劇場を10年の間閉鎖する命令を下しましたが、62年に起きた地震で町が大きな被害を受けて、この命令は撤回されました。
発掘時期: 1748; 1813-1814.

大運動場

“大運動場”は屋根のない大きな長方形の広場からなり、大きさはおよそ140×140m、回廊に囲まれて外側とは狭間胸壁のついた高い壁で遮断され、壁には10の門が取り付けられていました。広い中庭の三方にはプラタナスの木が植えられ、噴火が起きた時にはすでに樹齢□□□年程度でした。今日これらの樹木の根の部分の石膏型を見ることができます。中にはの中央には□□×□□mのプールが残されています。
運動場はアウグスティヌス帝の時代に建設され、若い市民たちの身体と知識の形成を目的としていました。壁面や柱の部分には、当時運動場に通っていた人々の残した詩的な、あるいはエロチックな内容の落書きが数多く残されています。
発掘の際には、ここに避難したりここから逃げようとした多くの犠牲者たちが見つかりました。
運動場にはフレスコ画の他にポンペイからおよそ□□□m離れたところにあった川岸の港に隣接したモレジーネのトリクリニオから出た出土品が常設で展示されています。
発掘時期：1935-1939.

開放されたトリクリニオあるいは夏の家

ノチェーラ通りに面し、大運動場の後ろ側に建つこの家には、限られた広さの中に併合されたそれぞれに独立した核が見られます。
広い庭園内には、紀元⌧⌧年の噴火時の様子を忠実に再現した、新しいブドウの畑を見ることができます。新しいブドウの木は、古代の木の根を形どった石膏型の脇に植えこまれ、当時と同じ方法で栽培されています。この家の名の元となった夏のトリクリニオにはガラス、軽石、貝殻を用いたモザイクで覆われたニッチの二つの噴水があって、優雅な空間を形成しています。
発掘時期：1933; 1954-1955.

エルコレの庭園の家

“連続した”家屋のタイプに分類されるこの家では、アトリウムの両脇に接続する空間はなく、ポンペイのこの地域の特色となっています。入口からは中庭に通じ、そこから家の奥にある、散水施設のある広い庭へ出られるようになっています。花粉の分析によって、この庭園では花(バラ、スミレ、ユリ)が栽培されていたことが判っています。また古代の文献によれば、こうした花々から得られたエッセンスは、肌用のオイルとして用いられ、テラコッタやガラス製の小さな瓶に詰めて保存し、売られていました。これらの小瓶は遺跡から大量に見つかっています。この家は、香水の製造と販売にも使われていたことが判ります。家の最初の工事は紀元前⊠世紀に遡り、庭園の東側にある小さな祠で発見されたエルコレの小大理石像にその名の由来があります。
発掘時期：1953-1954; 1971-1973; 1984.

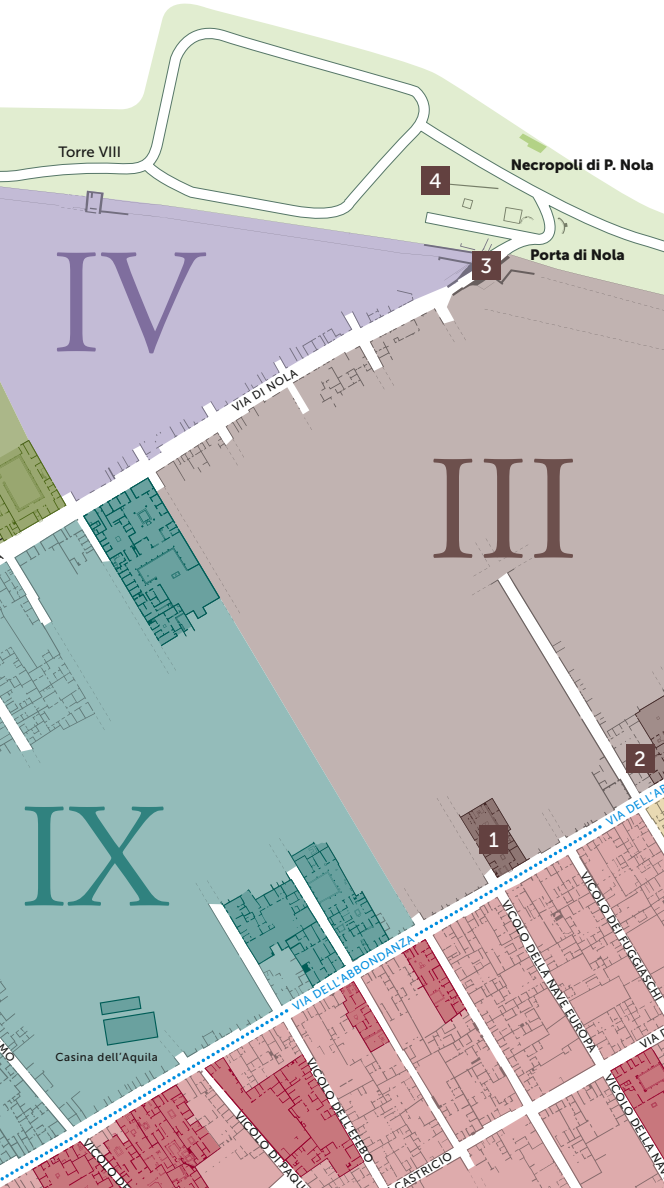
ノチェーラ門と外周壁

ノチェーラへ通じる道からポンペイの東南地区へと通じていたこの門の起源はサンニウム時代(紀元前⊠世紀)に遡ることができますが、現在の形になるまでには幾つもの改修工事が行われてきました。
建築的には、ノーラ門やスタビア門と類似した部分の多い建物です。ドーム型ヴォールトの空間が一つあって、そこに門が設置され、そこから両端に陵保の付いた廊下が伸びていて、入口を守ることができる仕組みになっていました。
石灰岩のブロック製で、後に道路のレベルが掘り下げられたため、高い建物のような印象を与えます。付近の外壁は石灰岩製の二重構造で、巡回用の歩廊があり、堡塁が備えられています。
発掘時期：1799; 1814; 1952; 1954; 1984.

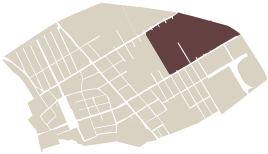
ノチェーラ門のネクロポリス

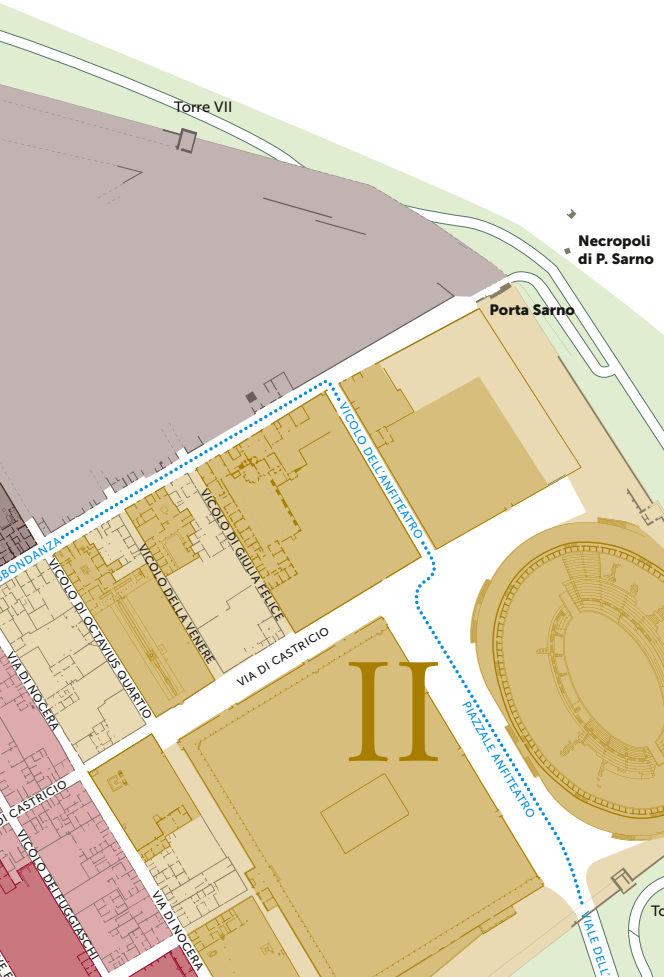
ネクロポリスは、外壁に平行に走る一本の道の両脇に形成されています。このネクロポリスが使用された紀元前⊠世紀初頭から紀元⊠⊠年までの、当時の一般的な記念墓碑が幾つも残されています。その中で注目されるのはフォロに大きな建物を奉納した女司祭エウマキアの墓です(参照ページ94)。柵の中には高い基壇が置かれていて、その上に半円筒状(エセドラ)の構造が載り、その内部に埋葬の部屋があります。エウマキアの墓の両脇には死者の像が納まる壁龕を載せた基壇のある二つの墓が見られます。一方、囲い墓と呼ばれる形態では、死者の遺灰を収めた壺は地表の溝か記念碑の基部に置かれています。もっと貧しい墓では“巻貝殻の軸”と呼ばれる粗野な石の胸像が載せられています。ノチェーラ門から出た道とネクロポリスが展開する道の交差点の中央にはティウス・スエディウス・クレメンスの石碑が見られます。彼は⊠⊠年の地震の後で、ポンペイに発生した違法建築の問題を改善するためにヴェスパシアヌス帝から派遣された行政官でした。
発掘時期：1954-1956; 1996-1997.

Regio III


Torre VIII
Necropoli di P. Nola
4
Porta di Nola
3
IV
VIA DI NOLA
III
2
1
IX
VIA DELL'ABBONDANZA
VICOLO DEI FUGGIASCHI
VICOLO DELLA NAVE EUROPA
Casina dell'Aquila
VICOLO DELL'EBREO
VICOLO DELLA NAV
CASTRICIO

1 トレビオ・ヴァレンテの家 42
2 モラリストの家. 43
3 ノーラ門と外周壁 44
4 ノーラ門のネクロポリス 45





トレビオ・ヴァレンテの家

アトリウムとペリスティリウムを備えたこの家は、共和国時代のローマの典型的な住宅例ということができます。正面は1943年のイギリス軍とアメリカ軍の爆撃で被害を受けるまでは、古代における壁面広告の最大の例でしたが、今日では東側の部分に黒色の掲示の一部が残るのみです。
この掲示には沢山の選挙関係のプログラムや円形劇場で催される出し物などが含まれ、当時の町の日常生活を彷彿とさせます。
家の最後の部分に展開する夏用のトリクリニオは、四角で軽快に彩色された壁面とそれを覆う四本の円柱で支えられたペルゴラが見られます。
家の所有者はトレビィと言い、ローマが征服するまではポンペイで最も勢力のあった家柄で、噴火直前の数年間その勢力を回復していました。
発掘時期：1913; 1915-1918.

モラリストの家

現在みられる建物は二つの住宅を統合して造られています。建物のほぼ三分の一は広い庭園で占められ、そこにはトリクリニオがあって、夏の間饗宴が催されていました。壁面には果実や木の実をついばむ小鳥が描かれています。壁にはまた、この家の名の由来となった銘文も刻まれていて、饗宴の間守るべき事柄、例えば言い争いをしない、他人の妻を凝視しない、足を洗うなどと書かれています。
トリクリニオからは庭園の一角の小さな礼拝所を望むことができ、出土した大理石の小像から明らかなように、女神ディアナに捧げられていました。
この家はワイン商人が所有していたものと思われます。マルクス・エピディウス・ヒメナエウス、カイウス・アリウス・クレシエンス及びティトゥス・アリウス・ポリテス、この三人の名前が家の正面の選挙掲示物には記されています。
発掘時期：1916-1917.

ノーラ門と外周壁

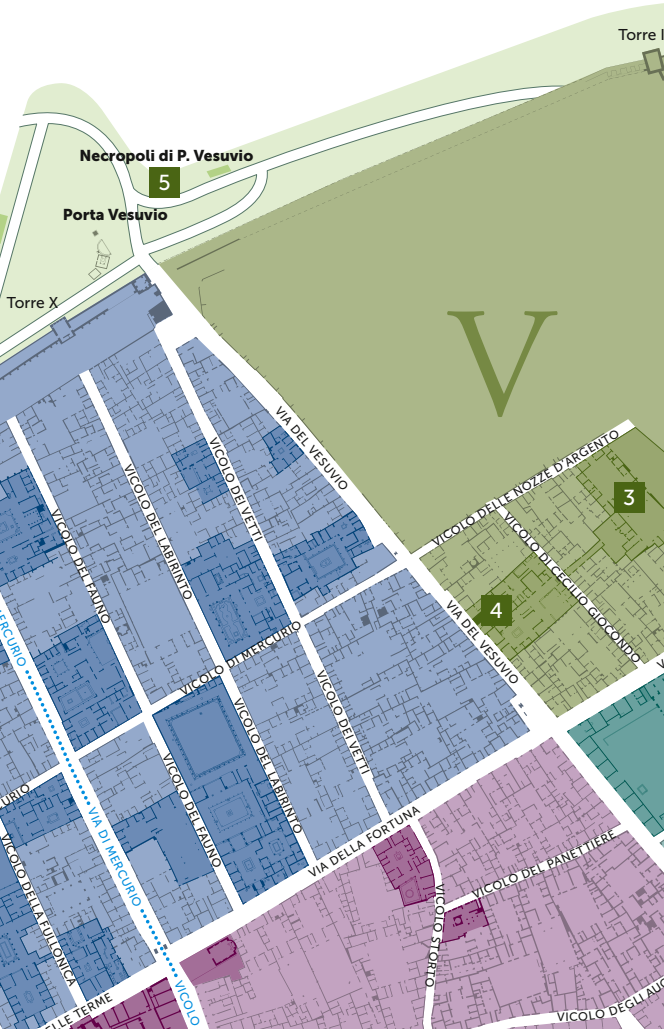
ノーラ門の名は、ここから古代の町ノーラへの道がはじまっていたことによるものです。
現在は大英博物館に所蔵されている、門の正面のオスク語による銘文によれば、門の建造を指示したのは当時最高職にあったヴィビウス・ポピディウスで、サンニウム時代の全盛期でした(紀元前3世紀)。門は凝灰岩のブロックを規則正しく積み上げて造られ、ドーム型の天井はモルタルと石を混ぜ合わせたセメント製です。
内部アーチのドーム型の中心にはミネルヴァ女神の頭部が彫られ、町へ入る際の守りを約束していました。門の外側には二つの稜保があって、そこから外壁が伸びています。この稜保によって、門によじ登って超えようとする者は盾で守れない横向きで狭く危険な城壁の喉を通らねばなりませんでした。門から町を出ると、右側の外壁がおよそ100mにわたって紀元前1世紀にモルタルと石を混ぜたセメントで改修された部分があります。一方、左側の外壁は石灰岩の基盤の上に凝灰岩を積んだ元々の姿を残しています。
発掘時期: 1813.

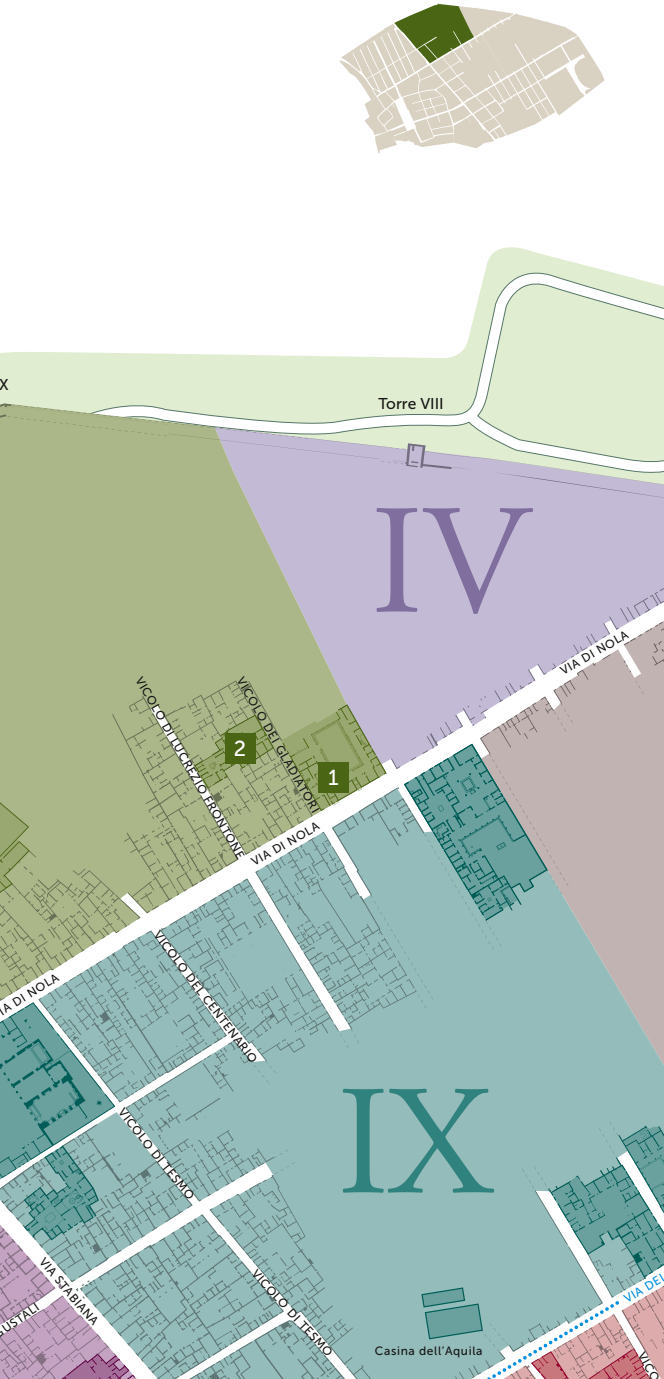
ノーラ門のネクロポリス

確認された墳墓は4基だけで、二つは半円形の椅子型、後の二つは柵で囲んだ墓の形式です。椅子型の墓のうち保存状態の良いものは、円柱とその上に載った大理石の壺からなり、22歳で他界したアエスクリア・ポッリアのために夫が建てたものです。もう一つの墓は無名ですが、墓の円柱の基部に記された祭具入れと麦の穂から、収穫の守り神チェネレを祭る女祭司で会ったと思われます。西側には柵のある墓が見られ、ペディメントには死者の名前がマルクス・オベリウスフィルムスと刻まれています。ポンペイで最も力のある行政官の一人で、ノーラ門の近くに豪華な家を所有していました。
ここからは噴火の犠牲者が15体発見され、石膏型が造られました。外壁の近くには、四人の皇帝の近衛兵の埋葬地もあり、碑文の刻まれた石柱が残されています。
発掘時期：1907-1908; 1978.

Regio V

1 剣闘士の兵舎 48
2 マルコ・ルクレツィオ・フロントーネの家 49
3 銀婚式の家 50
4 チェチリオ・ジョコンドの家 51
5 ヴェスヴィオ門のネクロポリス 52




X
Torre VIII
IV
VIA DI NOLA
VICOLO DI LUCREZIO FRONTONE
VICOLO DEI GLADIATORI
2
1
VIA DI NOLA
A DI NOLA
VICOLO DEL CENTENARIO
IX
VICOLO DI TESMO
VIA STABIANA
USTALI
VICOLO DI TESMO
Casina dell'Aquila
VIA DE

剣闘士の兵舎

この建物は剣闘士たちの同業組合の拠点で、内部からは120に及ぶ剣闘士関連の銘文が見つかり、ここが彼らの練習場であったことが判ります。紀元62年の地震の後、この建物は個人の住宅となりました。おそらくは59年にお気に入りの剣闘士の支持をめぐって円形劇場で起きたポンペイ市民とノチェーラの住民の間の激しい喧嘩の後、ローマの元老院の決定によって剣闘士の組合が閉鎖されたためと想像されます。
内部へと続く二つの階段があり、進んで行くと24本の円柱で囲まれた大きなペリスティリウムに出ます。円柱の間の空間は低い壁で塞がれ、壁面には狩りのシーンと牡牛に乗るエウロパなどの神話を題材とした場面が描かれています。ペリスティリウムに面して、トリクリニオやエセドラなどの公的な空間が並び、南側には居住用の部屋があります。この建物には、後から建てられた厩舎も付属していました。
建物自体は紀元前1世紀の中ごろに建設されています。
Data: 1842; 1890-1899; 1905; 1947; 2004-2005.

マルコ・ルクレツィオ・フロントーネの家

ドムスM. ルクレティ・フロントニス

シンプルな正面の背後には、ポンペイでも指折りの美しい住居が展開し、所有者の文化レベルの高さを証明する文学や美術に言及した極めて洗練された絵画が残されています。
中でもアトリウムとタブリーノでは、とりわけ主の繊細な感性が認められます。アトリウムには大理石製のインプルヴィオの池が目に入ります。また、獅子の脚を持つテーブルがあって、発掘された品々が展示されたいました。タブリーノにはバッカスとアリアドネの勝利、ヴィーナスとマルスのキューピッドたちが描かれています。近くには当時流行していた海辺のヴィラや静物画が配置されています。庭園の壁にはライオンやヒョウ、クマや家畜たちの狩りの情景が描かれ、当時この題材は半開放の空間の装飾にしばしば用いられていました。
家の所有者は行政官マルクス・ルクレティウス・フロントで、ここでも上の正面の選挙登録から名前が確認できます。
発掘時期：1899-1900; 1972-1974.

銀婚式の家

ポンペイの貴族階級の家がどのようなものであったかを示す壮麗で堂々とした建築の一例です。アトリウムに見られる高いコリント式の円柱などが、重厚な建築様式を示しています。ペリスティリウムはロードス式で、北側が他より高く設計され、ポンペイでは他にもアンカーの家(参照ページ57)や黄金のキューピッドの家(参照ページ67)などに同様の様式を見ることができます。残された品々に記された書き込みなどから、この家の最後の持ち主はルシウス・アルブシウス・セルススであったことが判明しています。
現在の姿は、紀元前40－30年にアトリウムに面した多くの空間が改装された時の姿を留めています。
家の名は1893年に当時のイタリア王ウンベルト1世とマルゲリータ王妃が銀婚式の日にここを訪問したことにちなんでつけられました。
発掘時期: 1883; 1891-1893; 1907-1908.

チェチリオ・ジョコンドの家

ドムスL. カエチリ・ユクンディ

飾り気のないポルタイユと内部の壁の工法から、最初に建てられたのは紀元前2世紀の半ばであることが明らかですが、その後、ポンペイ最後の時期にカエチリ家の所有となった際に本格的な改築と繊細な装飾が行われました。紀元79年の時点で一族の長であり、家の所有者でもあったルシウス・カエシリウス・ウクンドゥスに捧げられた青銅製の肖像がタブリーノの前で発見されて、現在はナポリの考古学博物館に展示されています。家の中から見つかった154に及ぶ蠟塗りの資料から、チェチリオ・ジョコンドは金融業者であったことが判っています。資料には紀元52から62年の間に財産(特に奴隷)を売った人々に支払われたお金や家賃の取り立てによって得ていた1－4%のマージンなどが記されています。この家からはアトリウムにあるラル神の祭壇を飾っていた大理石製のレリーフが2点見つかり、62年の地震による公共の建物への被害を示しています。
発掘時期: 1844; 1875-1876.

ヴェスヴィオ 門の ネクロポリス

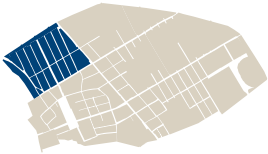
発掘によって4つの墓が掘り出されました。最も壮大なのは、行政官であったカイウス・ヴェストリウス・プリスクスの墓で、造られたのはおよそ75－76年ごろと推定されます。台座に載った祭壇に黄泉の国のシンボルを表現し、帝政期の一般的な墳墓様式を踏襲しています。フレスコとスタッコによる豊かな装飾が施され、死者の生前の公務姿の他にも、銀製の食器が置かれた食堂、ナイル川での饗宴、剣闘士の戦い、狩りの場面、静物などが描かれています。これらのテーマは、死者の生前の生活や行いを描いたものとも、あるいは死後の世界に結び付けるシンボリックな場面とも解釈できます。

半円形の椅子型墳墓はアレリア・テルトゥッリアの墓で、やや北側には別に円柱の墓碑が建っていてセプトゥミアの名が刻まれています。最後の墓は囲いのある墓で、溶岩性の台で仕切られ、マルクス・ヴェイウス・マルセリウスの名が刻まれています。

発掘時期：1907-1910.

Regio VI

1 ファウノの家 56
2 アンカーの家. 57
3 小さな噴水の家 58
4 悲劇詩人の家 59
5 テルモポリウム. 60
6 パンサの家. 61
7 パン焼きの家 62
8 サッルスティオの家 63
9 傷ついたアドニスの家. 64
10 ディオスクーリの家 65
11 ヴェッティの家. 66



12 黄金のキューピッドの家 67
13 アラ・マッシマの家 68
14 カステッルム・アクアエ 69
15 ナポリの王子の家 70
16 メレアグロの家 71
17 アポロの家 72
18 外科医の家 73
19 エルコレ門と外壁 74
20 エルコレ門のネクロポリス 75
21 ディオメデの家 76
22 秘儀荘 77

ファウノの家

ポンペイの住宅の中でも最も大きなものの一つで、およそ3000平方メートルに及ぶ一区画を完全に占有しています。最初の工事は紀元前2世紀に遡ることができます。
既に道の部分でこの家の所有者の富と社会的な地位を想像することができます。入口の前の歩道には歓迎を表す言葉(ＨＡＶＥ)がラテン語で記されています。壮麗な表玄関は装飾された柱頭を持つ角柱で囲まれ、入口の床には三角にカットした黄色、緑、赤、バラ色の大理石編で構成した象嵌模様(オプス・セクティレ)が施されています。両側の壁の高い部分には、家の守護神ラルを祭った小祭壇が浮き彫りで設えられています。
内部には二つのアトリウムと二つのペリスティリウムがあり、それらの周囲に他の空間が展開しています。接待用に使われた空間には見事な装飾が施され、それ以外にも家族のための空間、台所や浴室などの空間が整っていました。
メインのアトリウムにあるインプルヴィオの中央には、有名な踊るサテュロス、またはファウノの彫刻のコピーが置かれています。家の名はこの彫刻に由来し、同時に所有者であった人物の家名、すなわちサトゥリィを暗示しています。
二つのペリスティリウムの間にある居間(エセドラ)には、アレクサンダー大王とペルシア王ダリウスとの間の歴史を変えた大戦をテーマにした、有名な紀元前2世紀のモザイクの模作があります。
モザイクとファウノの像のオリジナルは、ナポリの国立考古学博物館に展示されています。
発掘時期：1829-1833; 1900; 1960-1962.

アンカーの家

メルクリオ通りに面したこの家は、入口にある錨のモザイクがその名の由来となっています。錨はそこに住む人にとって平安と安全のシンボルでした。この家の平面図はポンペイで他に例を見ない独自なプランです。
実際、家の後ろ側の部分は高さの異なる二つの階からなっています。上の階は接客用の3つの部屋を回りに配した広いテラスを中心にし、下の階はさらいに低い、角柱の並ぶ回廊をめぐらせた庭園で占められています。この回廊の腕の一つには、中央に二つの舵が描かれた大きなニッチとヴィーナス振興に使われた家庭用の祭壇が残っています。
発掘時期：1826-1827; 1828-1829.

小さな噴水の家

メルクリオ通りに面して重要な位置を占めるこの家の空間配置は、所有者の社会的な地位の高さを示すかのように、入り口を入った時から、奥の庭園にある見事な噴水を眺めることができるように設計されています。近年修復された貴重な噴水は、多色のモザイクと貝殻で装飾され、漁師とキューピッドのブロンズ像を載せています(彫刻は模作)。ペリスティリウムの両脇の壁面はすべて、噴火の数年前に描かれた大きな眺めの風景画で覆われ、中でも海辺の町は当時モチーフとして流行し、庭園の装飾に好んで使われていました。
元の高さに置き直された二つのアトリウムの覆いは、1971年の修復の際の成果で、古代の住宅空間の概念を与えてくれます。
発掘時期: 1826-1827.

悲劇詩人の家

伝統的なアトリウム形式を保つこの家は、入口の床面にあるCAVE CANEM(“犬に注意”)と刻まれたモザイクで有名です。このモザイクは現在ではガラスで保護されています。ペリスティリウム直接通じている脇の入り口から入ります。アトリウムとタブリーノには洗練されたモザイクが残っていました。そのうちの一つには、公演の準備をする役者たちのシーンがあって、家の名の由来となっています。
今の装飾には特別な注意が払われました。「イリアス」のエピソードによる神話の大画面のうち、「テセウスに捨てられたアリアドネ」が今日でも見られ、反対側の壁面には“キューピッドの売り”と名付けられた画面があって、1800年代の初め、この家の発掘の後にはこの絵が一般に人気を博しました。
ペリスティリウムには小さなニッチが付けられています。ほとんど家にあるラル神の祭壇で、ラルの諸神の他にも、家を守る神が祀られてていました。
壁画とモザイクのオリジナルはナポリの考古学博物館に保存されています。
家の内部にはエドワード・ブルウァー‐ロイトンが書いた小説「ポンペイ最後の日」(1838)の一部が再現されています。
発掘時期: 1824-1825.

テルモポリウム

ポンペイで発掘済みの部分(かつてのポンペイの町の2/3がこれまでに発掘済み)に89のテルモポリウム、飲み物と温かい食べ物を売っていたオステリアが確認されても、アトリウムのあるような大きな家に住む富裕な市民たちがそこで食事をしたわけではありません。オステリアを利用していたのは、社会的地位の比較的低い層の人々でした。ポンペイの町を歩いて回ると、大きな家に組み込まれた商店住居が道に面して住居や大きな家の一部を使った商店が見られ、こうした商店ではしばしば、内部は一つの大きな空間になっています。
職人や商人たちはここで生活し、仕事をし、しばしば上の階には彼らが家族と共に暮らす部分が確保されていました。こうした住居で台所が確認されることは稀です。つまり、彼らはたくさんあったテルモポリウムへ、出来たての熱い料理を食べに行っていました。
発掘時期:1820年代

パンサの家

アリアナ・ポリアナのインスラ

この家は一つの区画を完全に占め、ローマの貴族階級の住居の典型的な例を示しています。アトリウムとペリスティリウムが作る線に沿って、他の空間が見事なシンメトリーで構成されています。凝灰岩製の簡素な正面の中央には、この家が建てられた紀元前2世紀中盤に特徴的だった柱頭をあしらった大きな入り口が開いています。顕著なのはポンペイで見つかった7つのオスク語表記のうちの一つで、敵の襲撃の際に軍隊が配置される守備拠点が正確に指示されています。この赤い色の表記は現在はガラスで保護されています。16本の凝灰岩の円柱が取り巻く大きなペリスティリウムを囲んで接客用の空間が配置され、中央にはもとは魚の装飾が施されていた大きな池があります。現在は残っていませんが、隣接した細い道にあった長い賃貸募集の知らせから、この家の所有者カエウス・アレイウス・ニギディウス・マイウスはカンパーニア出身の裕福な商人で、紀元55-56年にかけては町のＤｕｏｖｉｒｏであった人物で、広い邸宅の一部を貸していたことが判ります。
発掘時期：1810; 1813-1815; 1824-1825; 1827; 1898; 1901; 1943.

パン焼き釜の家

最初に建てられたのは紀元前2世紀ですが、紀元62年の地震の後で修復工事が行われた際にパン屋に作り替えられました。地上階は仕事場になり、店のオーナーはおそらく上の階に住んでいたものと推定されます。パン焼きは非常に利益の上がる商売で、ポンペイではこれまでに30以上ものパン屋の跡が確認されています。パンを焼く大きなかまどの他、家の裏側にはペリスティリウムを改修して造った石畳の空間があって、麦を製粉するための巨大な4つの溶岩性の石臼と洗浄用の水桶が置かれていました。ひき臼の上部に差し込んだ木製の棒を人またはロバの力で回転しさせて使用していました ペリスティリウムの隣にあった家畜小屋からはラバの骨が一体丸ごと見つかっています。
発掘時期：1809-1810.

サルスティオの家

この家はサンニウム時代の住居の顕著な一例(想定建築時期紀元前180年)で、凝灰岩のブロックで造られた質素な正面や同じく凝灰岩製のインプルヴィオを備えたアトリウム、凝灰岩の円柱が囲む裏手の小さな回廊など、オリジナルな姿を全体的に保存しています。壁面装飾の大部分も建築当時のもので、ポンペイで最もよく保存された例の一つです。壁面に描かれただまし絵による大理石の化粧板からは、当時この家を訪問した人に与えたであろう重厚な壮大さが想像できます。この家はおそらく紀元62年の地震の後で宿屋として改装され、道に面した部分には上の階が増築され、インプルヴィオの縁に置かれたブロンズ製のエルコレと女鹿の像(現在はパレルモの国立考古学博物館に収蔵)や1943年の連合軍の爆撃で部分的に破壊された、小庭園の奥にある壁に描かれた女神ダイアナの猟犬に付き添われた等身大のアテオネの壁画など、装飾も部分的に新しくされたものと思われます。印章指輪が示すところによれば、この家の主はアウルス・コシウス・リバヌスという人でした。
発掘時期: 1806-1808; 1969-1971; 2005-2006.

傷ついたアドニスの家

もとは紀元前2世紀の半ばに建てられた家に、後年になって隣の建物を併合し、一つの大きな邸宅になりました。ポンペイが埋没する少し前に、建物内の多くの部分が改修され、壁画も大部分描き直されました。この時期のフレスコ画としては、庭園にある死にかけたアドニスと女神アフロディテの大きな画面が際立ち、この家の名の由来ともなっています。ギリシア神話によれば、この上なく美しい青年アドニスは女神アフロディテに愛されましたが、マルス(またはアポロという説)が嫉妬して放ったイノシシによって森で狩りをしている間に襲われたとあります。神話には、死にゆくアドニスの血がアネモネの花になったと記されています。庭園に向かって開放された大きな空間には、愛と所望をテーマにした別の大きな絵が残っています。左手の東側壁面には“雌雄同体のＴｏｅｌｅｔｔａ”と題されたフレスコ画の一部が見られます。これらの画面が暗示する、達成できない、実現不可能な愛は、古代の美術や文学では繰り返し取り上げられるテーマでした。
発掘時期：1835-1838.

ディオスクーリの家

ドムス　C N. CAETRONI EUTYCHI

ポンペイ最後の時代に造られた建物の中で、最も壮麗で広い物の一つです。建築的に複雑な空間の構成と豊かな絵画が特徴です。建物には、水の戯れを実現するための深い水槽に面して優雅な居間(エセドラ)を持ち、北側が高く設計されたロードス式の典雅なペリスティリウムを挟んで二つのアトリウムがあります。メインのアトリウムは凝灰岩の12本の円柱で囲まれ、その周りに豪華な来客用の部屋や饗宴用の空間が配され、奥は小さな庭園で仕切られていました。もう一つのアトリウムの周囲は家族の休息や日常の生活に使われた空間が囲んでいました。壁面の装飾は近くにあるヴェッティの家(参照ページ66)を手掛けたのと同じ工房によるもので、家の名の元となった入口のデイオスクーリ、カストルとポリュックスの壁画を始め、主要な作品はナポリの考古学博物館に展示されています。
発掘時期：1826; 1828-1829; 1837.

ヴェッティの家

ドムス・ヴェットリウム

ポンペイで最も有名で見事なこの家は、奴隷出身の自由民で商いで財を成したアウルス・ヴェッティウス・レスティトトスとアウルス・ヴェッティウス・コンヴィーヴァ兄弟が所有し、扉の右側にはあるじの経済的な繁栄を約束する神プリアポがシンボルとして描かれています。
アウグスティヌス帝の時代(紀元前1世紀)には改修されて、ファウノの家(参照ページ56)やサルスティウスの家(参照ページ63)に見られるような典型的な住居形式に変更が加えられ、タブリヌムを取り除いてより大きなスペースを、彫刻で飾られ噴水が溢れるこの館のメインとなる庭園に割いています。ペリスティリウムに面しては、より見事な装飾を施した部屋が集まり、中でもキューピッドたちが、ワインの販売や衣類の洗濯、花の栽培やブドウの収穫、宝石細工の加工や香料の製造など、当時の製造活動にいそしむシーンを描いたサロンのフリーズ壁画はとりわけ興味深い作品です。台所の区域にはラル神の祭壇が描かれ、近くにある官能的な小絵画で飾られた部屋では、家の入口に刻まれているように、エウティキスという名の娼婦がアス銅貨数枚で商売をしていました。
発掘時期: 1894-1895.

黄金のキューピッドの家

帝政期の住宅として最も洗練された例の一つで、一方のより高い列柱に載った破風が周囲の空間に神聖な雰囲気を与える、ロードス式の庭園を備えた舞台装飾のようなペリスティリウムを中心に展開しています。中でも、接客用の大きな居間には神話に題材を得た高い水準の壁画とアウグスティヌス時代に流行った中心に大きなバラ模様を配したモザイクの床が注目されます。ペリスティリウムの宗教的は雰囲気は、さらに二つの信仰の場によって強調されます。一つは伝統的な家の神ラル神が祀られたニッチで、もう一つは屋根のない礼拝所で、ジャッカルの頭部を持つ死者の神イヌビス神やイシス女神の息子アルポクラテ、イシスと癒しの神セラピスの壁画からわかる通り、エジプトの神々に捧げられていました。祭壇の脇にはイシスの祭祀に使われた道具が見られ、この家の主が祭司であった可能性もあります。庭園はまるで博物館の展示のようで、大理石彫刻やレリーフで飾られ、そのうちの幾つかはギリシアからのオリジナルでした。家の名の由来は、回廊にある寝室の壁を飾る黄金のメダイヨンに刻まれたキューピッドによるものです。壁の彫り物と印章指輪から、この家の主はネロ帝の2番目の妻ポッペア・サビーナと親戚関係にあったカナエウス・ポッパエウス・ハビトゥスであるとされています。
発掘時期：1903-1905.

アラ・マッシマの家

限られた敷地のため、一般的な住宅のプランを踏襲せず、快適な庭園もないこの家の中心はアトリウムでした。入口から伸びる直線状の、通常タブリヌムのある位置には小さな部屋があって、内部の壁の中央にはナルシスの神話に題材をとったフレスコ画が描かれています。同じ側には家の守護神であるラル神のニッチもあり、祭壇の両脇には幸運を招く二匹の蛇が描かれています。この家からはブロンズのエジプトのスフィンクスを形どった支えを持つテーブルが見つかり、現在はナポリの考古学博物館に展示されています。その他にも数多くのブロンズ製の製品に交じって、120もの魚釣り用の針が残されています。この家の名は、祭壇の前に立つエルコレのフレスコ画に因んだもので、祭壇は英雄がローマに建てたアラ・マクシマであるという見解が一般的です。従って、実際にはアルチェスティの墓所の前に立つエルコレとアドメテウスと解釈することができます。
発掘時期：1903.

カステッルム・アクアエ

この水道の分配設備はポンペイで最も標高の高い位置(42m)に設けられ、アヴェッリーノ近郊にあるアウグスティヌス時代のセリノの水道橋に接続され、ポンペイの町全体に水を供給していました。この水道施設の機能からは、古代の水道工事の水準の高さが証明されます。カステッルムは円形の巨大な水槽で占められ、北側にある送水管から送られてくる水を流量調節と水を分断する低い仕切り壁のシステムによって、必要に応じて水量の配分を調節していました。水は落ちる際の圧力を利用して高さの異なる三つの導管へ向かって導かれる仕組みでした。導管は必要な際には木製の楔を打ち込んで閉じることが可能でした。
この水道施設は紀元62年の地震で被害を受け、噴火の起きた72年の時点では町の中に設置された40の泉同様、機能していなかったものと推測されます。
発掘時期: 1902.

ナポリ王子の家

この家はもとは独立していた二軒の小規模な住宅を一つに造り直したため、間取りが不規則になっています。アトリウムの区域には町の最後の時期に制作された装飾が残され、特に上部の彩色ブロックの列はよく保存されています。インプルヴィオは有翼の獅子を形どった脚に載った大理石製のテーブルで縁取りされています。建物の後ろ部分は回廊と真ん中の庭園を中心に展開し、豊かな装飾が施されていて接客や饗宴に用いられました。ニッチの壁面には等身大のバッカスとヴィーナスが描かれ、トリクリニオの床面の中央には貴重な有色大理石の象眼模様が施されています。
また庭園の奥には家庭での礼拝に使われたラル神の祭壇がニッチの中に置かれています。
発掘時期：1896-1897.

メレアグロの家

建物の名は、直接町の中心広場へ通じる重要な道であったメルクリオ通りに向かって開いていた入口に描かれたメレアグロとアトランタの壁画に由来しています。この家が高貴な家系の人物の所有であったことは、アトリウムに残る噴水を備えた大理石製の高価な池やグリフィンの脚に載った大理石でできたテーブルなどからも明らかです。この建物の中心的な存在は後方に位置する大きなペリスティリウムで、これを取り囲む回廊の周りには社交用の主だった空間が、建築的なつながりに配慮して造られていました。特筆すべきは居間と応接間のスペースで、内部には見事なコリント式の円柱(コリント式のオエクス)が配置され、迷宮の家の例と共に、ポンペイでは唯一の作例となっています。中央の庭園には階段上の噴水のある青色に彩色された池があり、円柱の間に張られた幕が作る日陰の下、周囲の豪華な部屋に素晴らしい情景を与えていました。
発掘時期：1829-1830; 1837; 1962

アポロの家

ドムス・ヘレンヌレイ・コンムニス

現在見られる設計はポンペイ最後の時期のもので、二つの階からなる広い庭園を確保するために、建物は外壁の付近にまとめられていますが その結果この家の特色は庭園部分に集中しています。低い方の庭園には階段状の滝のある大理石の噴水があって、これに面して夏用のトリクリニオが建っています。その隣りには貝殻と有色ガラスを使った神話をモチーフとした三つのモザイクと石灰岩による洞窟風の外装で飾られた空間があります。現在元の場所に残っているのはオデュッセウスがシロ王の娘達の間に紛れ込んだ、女装したアキレウスを見破るシーンのみで、後の二つの作品、「三美神」と「アガメムノン対アキレウス」はナポリの考古学博物館に収蔵されています。一方、アポロの神話に題した作品はこの家の名の由来で、1830年に発見された印章指輪から、所有者はおそらくアウルス・ヘレヌレイウス・コッムニスであろうと推察されます。
発掘時期: 1830-1839; 2004.

外科医の家

この建物は、角を落とした石灰岩のブロックで造られた正面や屋内に見られる同様のブロックを水平垂直方向に交互に積み重ねる仕切りの壁の工法、より小さなサイズの石材で埋められたパネル部分などから、ポンペイに現存する中でも最も古い部類(紀元前3世紀半ば)に属することが明らかです。アトリウムの回りに主だった空間が配置された、オリジナルの様式を踏襲し、凝灰岩でできたインプルヴィオの他、後方には小さな中庭があって、窓のある空間が1つこれに接続しています。生き延びた装飾はこの空間に集中しており、外部に残るオリジナルの装飾と紀元50年より後に描き直された内部の装飾を見ることができます。そのうちの一つが今日ナポリの考古学博物館に展示されている、珍しい女流画家を描いた小作品です。この家の名前は、ここで発見された40以上に及ぶ検査用具やメスなどの外科道具に因んだもので、ポン英でも最初に発掘された建物の一つです。漆喰の上に刻まれた、トゥッリオという名の人物が1799年にここを訪れた際に残した記録から、この建物の一部がその当時すでに目につく状態にあったことを示しています。
発掘時期：1770-1771; 1777; 1926.

エルコレ門と外壁

門は紀元前89年にローマの将軍シッラがポンペイを征服したのちに建造されたもので、この当時すでに外壁がその機能を失いつつあった時期に造られたため、防御的な設計がされていません。三つの半円筒ヴォールトからなり、両側の二つはサイズが小さめで、中央のヴォールトは一部が崩れ落ちています。門の名前は、ここからエルコラーノに向かう道が出ていたことによるものです。門の内側では、これに続く防御壁はサンニウム時代(紀元前2世紀)以前に造られたもので、凝灰岩でできた大きな階段が歩哨路へのアクセスを容易にしていました。門の外側の左手には、大きな凝灰岩のブロックを規則正しく積み上げて造られた、高さ7mに及ぶ壁の一部が見られます。外壁の表面仕上げの上には、ポンペイ攻撃の際にとりわけこの部分を激しく襲ったシッラの兵が投げた石による傷跡が、今日でも残っています。
発掘時期:18世紀以降

エルコレ門のネクロポリス

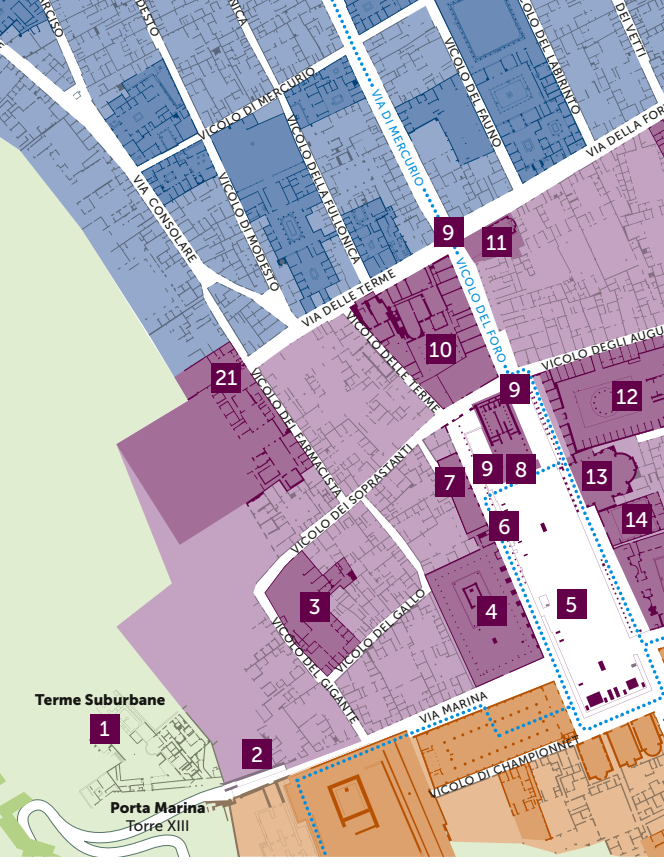
エルコレ門のネクロポリスは、ナポリに向かって伸びる街道沿いに広がっていました。現在見られる墳墓は紀元前1世紀以降のものですが、場所自体はすでにポンペイの歴史の最初の世紀の頃から利用されていました。ここに見られる記念碑的な墳墓は当時の代表的なタイプを示しています。エルコレ門から出て左側には、スコラ(ギリシア語のスコレ、スクオーラ=学校の語源)と呼ばれる、凝灰岩製の半円形の椅子型墳墓が見られます。この型の墳墓はポンペイに特徴的なタイプで、著名な市民や功のあった人に市のぎかいから贈られたものでした。これらの墓の一つには大きな文字で墓の主の名が刻まれています。フォロにアウグスティヌスの守護神の神殿を建てさせた公共の女祭司マミアが紀元29年に亡くなり、ここに埋葬されました。その他の墳墓は祭壇型の高い基壇の上に築かれ、ナエヴォレイア・ティケやムナティウス・ファウストゥスの墓には、劇場で最前列に座る名誉と港に入る船を表すシンボルとして、二つのベンチが表現されています。先に進むと、墓と墓の間に、多くのヴィラが点在するSuburbio、郊外地区が始まります。
発掘時期：1763-1838.

ディオメデスのヴィラ

古代の海岸線に向かって開けた庭園とプールを備え、三層にわたって展開しています。総面積は3500平方メートルに及び、ポンペイで最も壮大な建物の一つに数えられます。入り口から入ると直接ペリスティリウムに出、その周囲にはトリクリニオを始めとする、家で最重要な空間が配置されています。中でも印象的なのは美しい庭園で、中央には夏の饗宴用にペルゴラで覆われたトリクリニオとプールが配置されていました。浴室ゾーンに通じる扉の近くには2体の遺骸が発見され、そのうちの一体からは1346枚に及ぶセステルス貨幣の他、金の指輪と銀の鍵が見つかりました。
このヴィラはポンペイの中でも最初に発掘されたものの一つで、1800年代の旅行者にとって欠かせない目的地の一つになっていました。建物に刻まれたたくさんの名前の中にはカヴール伯爵なども含まれ、テオフィル・ガウティエはこのヴィラを舞台に短編「マルセル」を書きました。
ヴィラの名の由来は、建物の前にある墓に埋葬されているマルクス・アリウス・ヂオメデスにあります。
発掘時期：1771-1774.

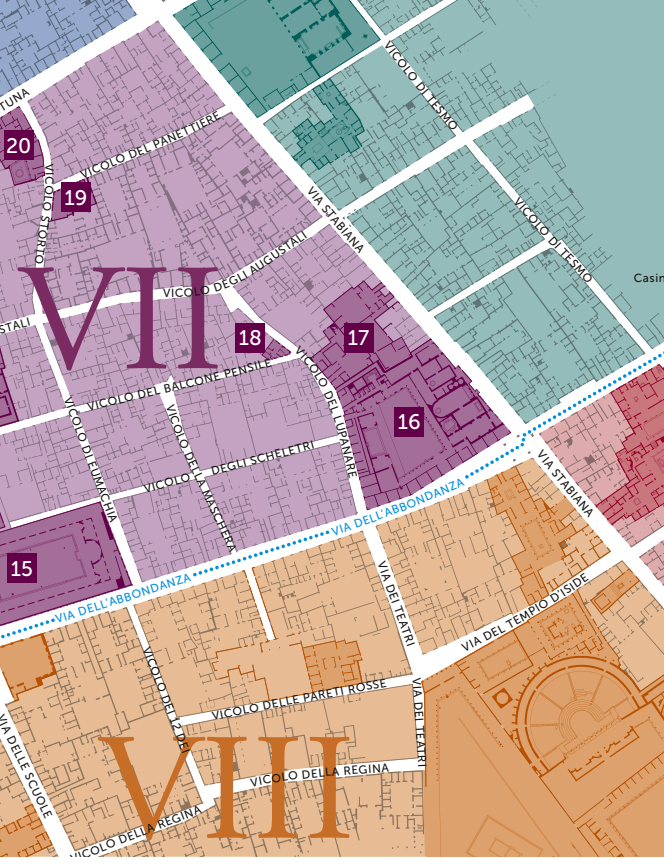
秘儀荘

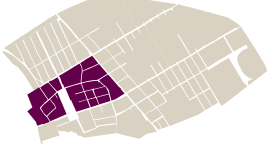
ヴィラの名称は建物内の、海を見晴らす居住部分に残る秘儀の間に由来しています。三方の壁面を占める連続したフレスコ画は、古代の絵画の中でも最もよく保存された例の一つで、信者のみが参加できる秘密の儀式の場面が描かれています。シーンは中央の壁に花嫁アリアンナと共に描かれているデュオニソスに関するものです。両側の壁には婦人たちの他にもファウノやマイナデス、翼のある人物などがそれぞれに、祭儀の任務を担っています。踊りや葡萄酒、デュオニソスの陶酔の他、座る夫人の膝に身を投げた若い女性の鞭打ちの儀式が描かれています(奥の右側角)。これ以外の空間にも、第2のスタイル、すなわち建築的な表現を用いた見事な壁面装飾が残されています。
一方、タブリウムにはエジプトに想を得たミニアチュールの絵画が現存しています。
ヴィラには葡萄酒を作っていた区画もあり、木製の圧搾機が再現されています。
建物の起源は前2世紀に遡りますが、現在の形になったのは全80-70年ごろで、秘儀のフリーズもその時期のものです。
発掘時期：1909-1910; 1929-1930.



Regio VII

1 郊外の浴場 80
2 マリーナ門と外壁 81
3 船員の家 82
4 アポロンの聖域 83
5 フォロ 84
6 ポンデラリアの食堂 85
7 フォロの穀物倉 86
8 ジュピターの神殿 87
9 名誉のアーチ 88
10 フォロの浴場 89
11 フォルトゥーナ・アウグスタの神殿 90
12 畜殺場 91





13 公共のラル神の聖域 92
14 アウグスティヌスの守護神の神殿
(ヴェスパシアヌスの神殿) 93
15 アウグスティヌスの調和の回廊
(エウマキアの建物) 94
16 スタビアの浴場 95
17 シリコの家 96
18 遊郭 97
19 ポピドゥス・プリシウスのパン屋 98
20 古代の猟の家 99
21 マルコ・ファビオ・ルフォと黄金の腕輪の家 100

郊外の浴場

郊外の浴場は、マリーナ門のすぐ下に位置していて、外壁に跨って造られていましたが、紀元前1世紀を通じて最終的にその機能を失いました。スタビアの浴場(参照ページ95)やフォロの浴場(参照ページ84)と違い、郊外の浴場は私設の浴場でした。
脱衣場(ポディテリウム)には官能的な主題の小作品が残り、上の階で行われていた商売、おそらくは売春を宣伝していました。このようなケースは、浴場ではしばしば不法で行われていました。
浴場の他の空間は見事な装飾で飾られていました。冷水の小さなプールでは、マルスに武器を渡すキューピッドたちを描いたモザイクで飾られた作り物の洞窟から水が注がれ、壁面には海戦の場面や海の動物たちが描かれていました。
暖められた部屋の区画には、通常の低温から高温までの空間の他に、奥に据えられたブロンズ製の火鉢で温められた水を使用した温水プールもありました。
発掘時期: 1960; 1985-1988.

マリーナ門と外壁

大地の端に取り付けられた要塞に似て、この門は西からこの町に入る入口で、ポンペイの7つの門の中でも最も堂々とした造りを誇っています。門の名はここから出る街道が海に向かっていたことから付いたものです。建物はモルタルと小石を混ぜて作ったセメントを利用したドーム状ヴォールトからなり、ポンペイがシッラの植民都市だった時代(紀元前80年)に遡ることができます。門には二つの半円筒ヴォールトがあって、メインの高いヴォールトを持つ通路は馬や荷役のロバなどが通り、前方の低い通路は人が歩いて通過するように分けられていました。今日目にする外壁の部分は、紀元前6世紀にはすでに造られていたもので、3200mの長さに及んでいます。壁は二重の構造で上には歩哨路が伸び、内側からは堡塁で補強されていました。12の塔があって、敵の襲撃を受けやすい北側の平野部にはより多くの塔を設置して、防御を確実なものにしていました。ローマの保護下に入ってからは、外壁の重要性は薄らぎ、時には家を建てるために利用されたり壊されたりしました。
発掘時期：1862-1863.

船員の家

この建物の建設推定時期は紀元前2世紀の終わり頃で、地面に大きな高低の差があったため、工事には工夫を要しました。解決策として低い部分にヴォールト天井で支えられた半地下室を造って高さを均一にし、できた空間は倉庫として使われました。ポンペイの町中の瀟洒な住居で、内部に広い商業・製造業向けの空間が確認されるのは異例のことです。家の中心的な空間はアトリウムで、紀元前1世紀の終盤に装飾がしなおされ、白黒の興味深いモザイクの作例が数多く残されています。この改修の際に、小さな浴場施設も付け加えられています。この建物は1871年に発掘され、入り口に造船所にある6隻の船の舳先がモザイクで描かれていることから、家の名前が付けられています。このテーマは家に住む人のの安全で平安な避難所を暗示し、おそらくは家の主の職業が船主であることもほのめかしているのではないかと推測されます。発掘時期: 1859; 1871; 2014.

アポロンの聖域

アポロンの聖域はポンペイで最も古い信仰の場所の一つで、マリーナ門から上って町の中心部へと進む道に沿って、重要な位置に建てられています。ポンペイ設立の信仰の神としてアポロンが選ばれたのはカンパーニアにギリシア人エトルリア人が存在していたことによります。更に深い層まで行った発掘によって出土した壺や奉納品、テラコッタ製の装飾などから、アルカイック期(紀元前6世紀)にはすでに、ここに神殿が建っていたことが判明しています。紀元前3から2世紀にかけて、古い神殿は完全に建て直され、その後ネロ帝の時代に小規模な手直しが行われた外はあの噴火の日まで元の姿を維持してきました。神殿は基壇の上に建ち、中老で囲まれ、中央の空間には祭壇が置かれていました。東側の壁には連続した開口部があり、おそらくはテラスのあった壮大な列柱がこの神域と法廷の広場を結んでいました。広場では剣闘士の戦いや演劇の上演などアポロンの興行と呼ばれた見世物や、アポロンと双子のディアナを守護者としていた児童たちが行う神を讃える祭りなどが行われました。価値あるブロンズ像のアポロンとディアナはヘレニズム時代の作品で、現在はナポリの考古学博物館に保存されています。
発掘時期：1816-1817; 1931-1932; 1942-1943; 1997; 2015.

フォロ

市民のフォロは市民の日常生活の中心の場で、これに面してすべての公共の建物が並び、町の運営、司法による裁き、事業の管理、市場などの商取引が行われたほか、町の信仰の場でもありました。
フォロの広場はもとは打ち固めた地面でほぼ定型の単純な開放空間で、西側でアポロンの聖域に隣接し(参照ページ 83)東側には商店が並んでいました。フォロは紀元前3から2世紀にかけて根本的に造り直され、正確な形と凝灰岩のスレートを敷き詰めた床を持ち、回廊に囲まれた姿に返信しました。広場の中心軸はヴェスヴィオ山を結ぶ直線状にあるジュピター神殿(参照ページ87)のファサードを起点に引かれました。
帝政時代の初期に、フォロの床は新たにトラヴァーチンで敷き直されました。このうち幾つかの敷板は取り払われて、できた窪みには重要な碑文を刻んだブロンズ製の板が嵌め込まれました。この部分の発掘はマリー・カロリーヌ・ボナパルテの希望で開始されて間もなく、すでに古代に盗掘されたいたことが判明しました。
発掘時期: 1813.

ポンデラリアの食堂

アポロンの聖域を取り巻く壁の東側にはニッチがあって、内部には量り台の模作が置かれ、原作はナポリの考古学博物館に保存されています。
量り台は、商いのやり取りで商品の容量を審査するのに用いられた作業台です。ここでは液体の商品や穀物などのような固形のものも計量することができました。計量する品をそれぞれ用意された入れ物に詰め、蓋をして量った後、再び容器から出しました。オスク語にで記された三つの記録によれば、この量り台はローマの登場前から存在していましたが、ポンペイがローマの傘下に入った(紀元前80年)のを機会に、ローマの重量単位と計量法に改正されたことを記す書き込みが今日でも読み取れます。
発掘時期：1816-1817.

フォロの穀物倉

フォロの西側に広がり、レンガの柱で仕切られた8つの開口部を持つ建物で、果物と野菜の市場として使われていました(フォロ・オリトリオ)。今日ではポンペイ最大の考古学品の倉庫として使われ、1800年代の終わりからこの都市で行われてきた発掘による出土品9千点以上がここに保管されています。ポンペイ最後の10年間に日常の生活で使われた、鍋などのテラコッタ製品、竈や水差し、瓶、アンフォラ、油や葡萄酒、魚精を地中海全域から運搬するための大きな容器などが収蔵されています。他にも、家々の入り口を飾っていた大理石製のテーブルや噴水用の水槽、犠牲者や犬、樹木の石膏型などが陳列されています。
建物は紀元62年の地震の後で建設され、噴火が起きた時点ではまだ工事が完成していなかったのではないかと想像されます。
発掘時期: 1816-1822.

ジュピターの神殿

ジュピターの神殿はフォロの北側を占め、その後ろにはまるで映画の背景のようにヴェスヴィオ山が聳えています。
ローマの植民都市に組み入れられてから(紀元前80年)、神殿には大きく手が加えられて正真正銘のカピトリウムに生まれ変わり、ジュピター、ユノー、ミネルヴァの三神の像が祀られ、ローマのカピトリウムに準じて整備されました。高い基壇の上に建ち、フォロを通る誰の目にも入る建築でした。新たな工事によって聖像安置室が延長され、床には大理石製の立派な装飾が施されました。
基壇にはファビサエと呼ばれる地下室が造られ、本来は神々に捧げられた奉納物を収める空間でした。幾つかの研究成果によれば、この空間はその後町の公共の財産を保管するのに使われたと言われています。ルシウス・セシリウス・イヨコンドゥスの家のラル神の祭壇にあるレリーフによって、カピトリウムの基壇の左右には2体の騎馬像が置かれていたことが判ります(参照ページ 51)。
発掘時期: 1810; 1816; 1820.

名誉のアーチ

フォロの北側に位置するジュピター神殿(参照ページ87)の両脇には、古代にはレンガ造りで大理石で化粧張りされた二つのアーチがありました。
東側にあったアーチはわずかに基壇が残るのみで、カリギュラ皇帝に捧げられ、彼の死後取り壊されました。西側にあったアーチは、ティベリウス帝の息子ドゥルーゾに捧げられたものでした。前出のセシリウス・イオコンドゥスの家に残るラル神の祭壇のレリーフからは、紀元62年の地震で倒壊し、その後建て直して再度装飾された様子が描かれています。
フォロの回廊の東側にある出口の北側には二つの半円筒ヴォールトからなる別のアーチがあって、かつては大理石で覆われていました。上部には大きな水槽が載っていて、正面外側にある泉に水を供給し、ユリウス-クラウディウス朝の諸皇帝の像で飾られていました。おそらくはゲルマニウスに捧げられたもので、カリギュラ帝のアーチのの代わりを果たしていました。
ティベリウス帝の時代(紀元14-37年)にはフォルトゥーナ・アウグスタ神殿(参照ページ90)の近くにメルクリオ通りを跨ぐ形で別のアーチが建てられました。
このアーチによって、諸皇帝の祭祀に関連した一連の建物の列が終了します。
発掘時期: 1816.

フォロの浴場

フォロの浴場はジュピター神殿(参照ページ 87)の後ろに位置し、将軍シッラによってポンペイがローマの植民都市となって(紀元前80年)間もなく建設されました。入口は婦人用と男性用に分けられていました。男性用の区画ではアポディテリウム(脱衣場)がテピダリウム(中温の風呂)としても利用され、続いてフリジダリウム(低温の風呂)、カリダリウム(高温の風呂)がありました。ポンペイの他の多くの建物と同様に、この浴場も紀元62年の地震で大きな被害を受けています。現在見られる状態の大部分は、その後の修復作業の結果と言えます。
内部装飾の素晴らしさは注目に値し、入浴の際に衣類や持ち物を置くためのニッチにはテラコッタ製の弾性像が飾られ(テラモニ)、アポディトゥリウムとテピダリウムのスタッコ仕上げのレリーフのあるヴォールトなどが特筆されます。同じ空間には暖房に使われたブロンズ製の大きな火鉢が見られます。婦人用の区画はより小さく、噴火の時点では修復中でした。男性用の施設入口の近くでは、夜間の開場時間に使われたカンテラが500個以上も見つかっています。
発掘時期: 1823-1824.

フォルトゥーナ・アウグスタの神殿

基壇の上に載り、大理石の円柱と柱頭と全面の祭壇を持つこの小さな神殿は、ローマ全体に行き渡っていたように、単に皇帝アウグストゥス(紀元前31-後14年)を讃える信仰の場ではなく、地元のエリート階級による皇帝一族擁護の宣伝の場でもありました。この神殿については建設を命令した人物の名が記録に残っています。マルクス・トゥリウス、別のマルクスの息子でポンペイのＤｕｏｖｉｒｏでした。自らの所有する土地に自費で皇帝礼賛の神殿を建設することで、マルクス・トゥリウスは皇帝の有力な支持者としての地位を得ました。フォルトゥーナ・アウグスタの信仰は自由民の信者で結成された組織によって運営され、彼ｒは皇帝と協力な繋がりを持ち、皇帝は彼らの権利と野心を保証する関係でした。神殿を覆っていた大理石の化粧板は、噴火の数年の血には持ち去られました。神殿内の製造安置室にはフォルトゥーナ神の像が置かれ、両側のニッチには皇帝一族の像が並んでいました。
発掘時期：1823-1824; 1826; 1859.

マチェルム

マセルムは凝灰岩でできたクワドリポルティコからなり、入口から伸びる中心軸上にある東側の高い位置には礼拝用の広間がありました。側面の壁のニッチには武具を身に着けた男女一対の大理石像のコピーがあります。オリジナルの像はおそらくティトゥス帝かヴェスパシアヌス帝と思われる大きな彫像の断片とともに発見され、この場所も皇帝信仰の場所であったと想像されます。左隣には宗教組織の集まりに使われた空間があり、右側には壁づくりのカウンターを備えた大きな空間が残っていて、魚を売っていたのではないかと想像されます。
中庭の中央には円形の建物(ソロス)があり、ここも魚を捌いて売る場所として使われていました。南側には商店が並んでいました。回廊の壁面には魚や鶏の販売などの日常の風景と共に、神話を題材とした場面も描かれています。
建物は紀元前130-120年に建設されました。
発掘時期：1818; 1821; 1888.

公共のラル神

アウグストゥスの守護神の神殿(後述)やアウグストゥスの調和の回廊(参照ページ 94)と同じく、この聖域も皇帝信仰のために以前は商店が立ち並んでいた区画を用いて建てられました。
フォロに向かって完全に開放された設計の大きな建物で(参照ページ 84)、中央にあった祭壇では皇帝や公共のラル神のための供犠が行われました。中央のアプシス(奥室)の両側には二つの大きなエクセドラと沢山のニッチがあって、皇帝一族の像が安置されています。見事な大理石の化粧板は79年の噴火後間もなく略奪され、現在では小さな一部分を残すのみとなっています。
この聖域は紀元62年の地震より以前、アウグストゥスの治世(紀元後最初の10年)よりは後に造られています。
発掘時期: 1817.

アウグストゥスの守護神の神殿(ヴェスパシアヌスの神殿)

アウグストゥスのの守護神の神殿は、この神と灰の神の女祭祀だったマミアに願いによって建てられたことが記録によって明らかです。アウグストゥスの治世(紀元1世紀の最初の10年)に神殿が建設されると、続いて隣のアウグストゥスの調和(参照ページ 94)の回廊の工事が開始されました。今日残るファサード下部の大理石装飾やニッチのモチーフ、あるいは紀元62年の地震の後で修復され一部完成していた祭壇からは、この二つが同じ建築のプロジェクトとして進められていたことが判ります。神殿には小さな中庭と祭壇、高い基壇の上に建つ4本の円柱のある小神殿で構成されていました。
今日、エウマキアの調和の回廊の入り口に見られる花々と動物たちをモチーフにした素晴らしい大理石製の装飾は、おそらくはこの神殿の入り口を飾っていたものと思われます。フリーズはローマにあるアラ・パチスをモデルにして制作されています。
発掘時期: 1817.

アウグストゥスの調和の回廊(エウマキアの建物)

フォロの東側部分で最も大きなこの建物は、ポンペイの裕福な家柄の出身で女神ヴィーナスを祭る女祭司であったエウマキアが皇帝を礼賛のために建てさせたものです。
入口の手前にある柱廊の下には、かつてはポンペイの金持ちや重要人物の像が並び、大きなポルタイユの両脇、ニッチの下には今でもロムルスとアイネイアスに向けた二つの称賛の詩が、彼らの英雄的な行為を列挙しながら刻まれています。ポルタイユの縁を飾るアカンサスの葉の唐草模様とそれに集まる動物たちの、大理石による豊かな装飾はフォロで発見され、誤ってここに付けられましたが、実際は近くにあるアウグストゥスの守護神の神殿にあったものです(参照ページ 93)。
内部には三方に伸びる柱廊があって、東側の短い翼には三つのエクセドラが配され、中央の大きいエクセドラには、現在ナポリの考古学博物館に保存されているアウグストゥスの調和の像が納められていました。この柱廊の後ろ側にはこれも三方に伸びる屋根付きの廊下があって、中央にエウマキアの像が置かれていました。現在置かれているのはコピーで、実物はな
当時の見事な多色大理石による装飾は、フォロの他の建物と同様、噴火の後間もなくすべて持ち去られてしまいました。
発掘時期：1814; 1817; 1836.

スタビアの浴場

アッボンダンツァ通りに面したメインの入り口から入ると、広い中庭に出ます。左側にはプールがあり、右側には柱廊があって男性用の施設へと通じています。施設にはアポディトゥリウム(脱衣場)、それに続くフリジダリウム(低温の浴室)、更にテピダリウム(中温の浴室)、最後にカリダリウム(高温の浴室)が備わっていました。暖房は壁の中の配管を通じて巡り、床面も二重の構造で窯からくる熱い空気と移動可能な火鉢によって暖められていました。
婦人用の施設は男性用の背後に位置し、同様にアポディテリウム、テピダリウムとカリダリウムで構成されていましたが、全体の規模は小さく、男性用施設のような見事な装飾もありませんでした。婦人たちは、中庭の北西の角に当たる、ルパナーレ通りにあった別の入り口から入るようになっていて、戸口の上には"Mulier"(女性)と書かれていました。男性と女性の区別は古代世界では一般的なことでした。
スタビアの浴場の起源は前2世紀まで遡ることができ、古代ローマ世界のうちでも最も古い浴場の一つに数えられます。
発掘時期：1853-1857; 1865.

シリクスの家

ドムス・シリチ

この大きな住宅は紀元前1世紀に、スタビア通りに面した家とルパナーレ通りに面した家の二つを統合してできたものです。噴火が起きた時、この家ではちょうど内部の壁面装飾を、当時の好みに合わせて全面的に新しくしている最中でした。既に完成していた部分の一つエクセドラでは、大理石版で装飾された見事な床を取り囲んで並ぶ寝台に横たわりながら、客人たちが饗宴を楽しみ、それを取り巻くように神話をテーマにしたフレスコの壁が並んでいました。トロイ戦争を題材にしたフレスコの一部は今日ナポリの考古学博物館で見ることができます。この家の最後の所有者はプブリウス・ヴェディウス・シリクスで、この名の刻印された印章が発見されて判明しました。シリクスはポンペイの政治家・商人のクラスに属し、毎日のように支持者の人々を家に招いていました。入口の床にはSALVE LUCRU儲けよ、よく来た！の言葉が刻まれています。
発掘時期：1851-1852; 1857-1859; 1862; 1872-1873.

ルパナーレ(遊郭)

遊郭の娼婦たちは、主に東方やギリシアの奴隷たちで、銅貨2から8アスで商売をしていました(その当時グラス1杯の葡萄酒が1アス)。
建物は2階建てになっています。上の階には主と奴隷たちの住居があり、下の階には5つの部屋があって、どの部屋にも石と漆喰でできた作り付けの寝台が備わっていました。これらの部屋は1階の二つの出口をつなぐ廊下に沿って並んでいました。各部屋の入り口にはカーテンが扉の代わりにかかっていました。廊下の行き止まり、階段の空間の下には共同のトイレがありました
中央の廊下の壁には、官能的な絵が配されて、ここで提供されるサービスを客に示していました。
ルパナーレの呼び名はラテン語のlupa、娼婦を卑下するのに用いた言葉に由来しています。
発掘時期: 1862.

ポピディウス・プリスクスのパン屋

ここでも、他と同様に製粉所とパン屋は一続きになっています。粉とパンの製造は、同じ一つの製造過程に含まれるためです。
小麦は溶岩でできた大きなひき臼で製粉され、このパン屋には5台のひき臼が残されています。ひき臼は円錐形をした下部(メータ)と砂時計の形をした上部(カティルス)の二つの部分からなっています。小麦はカティルスに注がれ、奴隷や家畜によってカティルスが回転すると製粉された粉が下に落ちます。
建物の中央に置かれた大きな窯では、色々な形のパンが焼かれ、できた製品は同じ場所で、小さな空間にカウンターを置いて販売されていました。このパン屋にはカウンターがないため、製品は注文に応じて造作っていたか、卸で売っていたか、あるいはリバニと呼ばれた行商人達が売り歩いたかだと考えられます。
発掘時期:1820年代

古代の狩りの家

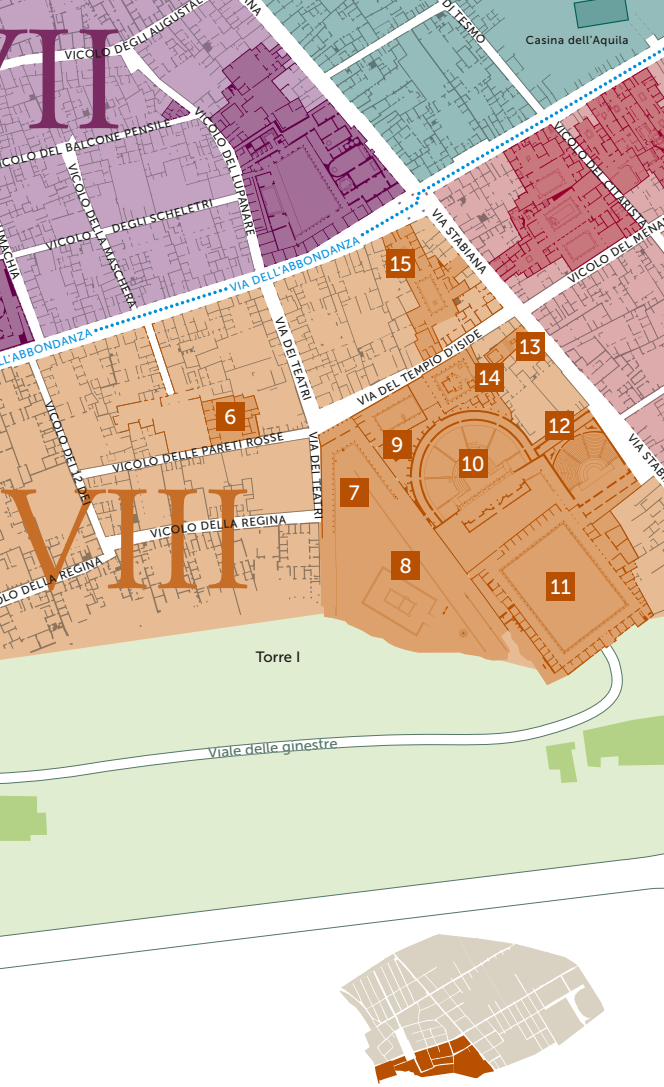
この家は紀元前2世紀に建てられましたが、前半の部分は入口、アトリウム、タブリヌムが同軸上に配置される、古代ローマの住居の典型的な例となっています。一方、空間に限りがあるため、ペリスティリウムの後方はかなり不規則な形です。4つの柱廊の代わりに2つの柱廊のみが造られ、これらが鋭角で接しています。
噴火前の数年間に修復されたフレスコ画では、庭園に面した中央の空間に描かれた神話を題材にした小画面が光っています。アポロンと一人のニンフ、ディアナとアテオンの姿が描かれています。アテオンは水浴をしていたディアナの裸身を見てしまったために女神によって鹿に変えられてしまった猟師です。家の名のもととなった狩りのシーンは、ペリスティリウムに描かれていましたが、気象現象が原因で退色してしまっています。
発掘時期：1823; 1833-1834.

マルコ・ファビオ・ルフォと黄金の腕輪の家

マルコ・ファビオ・ルフォと黄金の腕輪の家は少なくとも⊠階まであり、海に向かって次第に低くなる眺望の良いテラスも付いていました。これらのテラスは町の外周壁の上に造られていますが、ローマの植民地になる前は、ノーラ街道とテルメ通りの終着点であったオッチデンタリスの門の両側には住宅が何軒も建てられていました。
家の内部には、有色大理石の床(オプス・セクティレ)や神話のテーマ、庭園の情景、紀元前⊠世紀に遡るギリシアの作品を再現したフレスコ画面など、豪華な装飾が見られます。噴火の時、この家には人々が住んでいたことが、発見された多くの遺骸から明らかで、これをもとに石膏型が取られました。
家に付けられた黄金の腕輪という名は、見つかった遺骸の一つが子の腕輪を付けていたことによります。
発掘時期：1759; 1910; 1940; 1958-1980.

Regio VIII

1 ヴィーナスの聖域 104
2 バジリカ 105
3 コミティウム と市役所 106
4 シャンピオネットの家 107
5 幾何学模様のモザイクの家 108
6 バラ色の壁の家 109
7 三角のフォロ 110
8 ドリス式神殿 - アテナとエルコレの聖域 111
9 サンニウムの体育場 112



10 大劇場 113
11 劇場のクアドリポルティコまたは剣闘士の兵舎 . 114
12 小劇場 - オデイオン 115
13 エスクラピウスまたはメイリキオのジュピターの神殿. . 116
14 イシス神殿. 117
15 コルネリイイの家 118

ヴィーナスの聖域

ヴィーナスの聖域はナポリ湾を見晴らす素晴らしい眺めの良い人工のテラスの上に造られ、ポンペイの持つ港を遠くから監視することができました。
ヴィーナスはポンペイの守護神であり、前⊠⊠年にローマの傘下に入る際にはポンペイの町はこの女神に奉献されました。ローマ時代以前からすでに信仰の対象で、後には航海の守り神としての性格も与えられました。
紀元⊠⊠年の地震とそれに続いた出来事で、神殿は大きく破壊され、⊠⊠年の時点で再建工事はまだ完成していませんでした。
最初の聖域は紀元前⊠世紀のもので、柱廊に囲まれた空間の中央に神殿が建っていました。現在見られる遺構は、帝政ローマ時代初期のものです。
⊠⊠⊠⊠年代に行われた発掘で、神殿の製造安置室の奥に仮り寄せして建てられた小さな祈祷所から、ネロ帝が寄進した重さ896gの大きな金のランプが見つかり、現在はナポリの考古学博物館に収められています。
発掘時期：1852; 1869; 1872; 1898; 1937, 1952-1953; 1984-1985; 2004-2005.

バジリカ

延べ面積1500平方メートルに及ぶバジリカは、フォロ(参照ページ 84)の区域で最大の建物で、裁判や商取引に使われていました。
フォロから凝灰岩の柱の間に開いている5つの入り口を通じて中に入ることができ、内部はレンガでできたイオニア式の柱頭を持つ2列の円柱によって3つの廊に分かれています。　西に面した短い方の側面の中央には見事な装飾を施した特別席があって、裁判の際にはここに司法官たちが座りました。空間には騎馬像が置かれ、壁面は大きな大理石のブロックを模したスタッコ装飾で豊かに飾られています。
バジリカの建設時期は紀元前130-20年頃と推定され、このタイプの建築としては、古代ローマ世界の中でも最も古い建物の一つです。19世紀にフォロの区域で発掘調査が始まった時代にこの建物も掘り出されました。
発掘時期：1806; 1813; 1820; 1928; 1942; 1950.

コミティウムと市庁舎

コミティウムは、フォロの広場の南東の角にあります。紀元前2世紀を通じて建設が行われ、もとは選挙を管理する組織の所在地でしたが、時代が進むと開票作業の場となりその結果選ばれた新たな行政官が宣言する(Diribitorium)場所へと変化しました。一方、フォロの広場は投票所として使われました。この建物の政治的な重要性は、アッボンダンツァ通りに面した入り口の柱や南に面したトゥリブーナを覆うたくさんの選挙掲示物によって知ることができます。
広場の南側には、西から東に3つの公共の建物が並んでいます。タブラリウムは記録保管所で、間に空間をは残だ二重構造の壁で造られ、火災の場合の周辺の建物からの延焼を防げるようになっていました。クーリアは地元の元老院の所在地で、集会の時に使用する大ぶりな椅子が置けるように広々とした空間を持ち、ドゥオヴィロの建物は行政官たちの執務の場でした。
これら3つの建物はすべて、コミティウムやバジリカへと続く柱廊に面し、全体でポンペイにおける社会的な生活に関連する建物のグループを形成していました。
発掘時期：1814; 1826.

シャンピオネの家

シャンピオネの家はポンペイでも有数の贅沢な建物で、海に向かって次第に低くなる、少なくとも4層からなる邸宅でした。
4本の円柱で仕切られたアトリウムと幾何学模様の多色モザイクの床面装飾を見ることができます。下の階には浴場施設が造られ、共和制後期(紀元前2-1世紀)にはすでに機能していました。
ここで発見された壁面の豊かな幾何学模様は、18世紀の終わりから19世紀の初めにかけて、様々なデザインに再製コピーされて使われました。
発掘時期：1799; 1812; 1828.

幾何学模様のモザイクの家

ポンペイ全体を通じても最大級の住宅で、部屋数60以上、建物の敷地面積は3000平方メートルに及んでいます。敷地の自然な傾斜を利用した2階建てで、幾つものテラスを持ち、訪れる客人たちをサルノ川の谷の景観で楽しませました。白黒のモノクロームで描かれた、迷宮模様やチェスボード模様のモザイク製の床装飾が際立っています。
もとは別々であった、アトリウム付きの2件の家を一つにしたもので、結果典型的なローマの邸宅が造られました。広いアトリウムにタブリウムが続き、そこから柱廊や大きなペリスティリウムに出ることができました。ペリスティリウムの建設によって、この家の規模はさらに大きくなり、フォロのエリアにまで到達しています。
現在見られる姿は紀元62年の地震以後、修復工事が行われた後のもので、その際に家の正面も造り直されています。
発掘時期：1826; 1889-1899; 1928-1929; 1932.

赤い壁の家

建物のもとの設計は共和政時代に遡りますが、紀元62年の地震の後、大規模な改修が行われてました。幾つかの空間で、漆喰を塗った状態でフレスコが描かれていない壁面が残っていることから、79年の噴火の時にはまだ修復の工事が続いていたことが判ります。
一方、家の名となった特徴的な赤を使った壁面のある部屋はすでに作業が完了していました。
アトリウムには小さなニッチには、家庭での礼拝に用いられたラル神の祭壇があって、家を守るブロンズ製の神像が6体そこから見つかっています。
発掘時期：1832; 1882.

三角のフォロ

三角形のフォロのは、その名の通り特殊な三角の形で、サルノ川の谷と河口を見下ろす溶岩が形成する稜の上に広がり、ポンペイでも最も古い紀元前6世紀頃の聖域を今に伝えています。
このフォロには、テアトリ(劇場)通りから、噴水を前に壮大な正面を形成する6本の円柱の並ぶポーチを通って行くことができます。
内側の柱廊は紀元前2世紀に建てられ、凝灰岩でできたドリス式の円柱を持つ神殿の区域を取り囲んでいます。神殿へ登る階段の手前には長方形の2重の囲いがあって、ポンペイの伝説の創始者エルコレの墓とされています。囲いの後ろにはドリス式の柱を持つ円形の建物(ソロス)があって、サンニウムの行政官ヌメリウス・トレビウスが作らせた井戸を取り巻いています。
広場の東側にはサンニウムの運動場が広がっていました。
発掘時期：1765; 1767-1768; 1813; 1899; 1905; 1931; 1981-1996.

ドリス式神殿-アテナとエルコレの聖域

ポンペイの港があった湾を見張るように張り出していた脚の部分には石灰岩で建てられたドリス式の神殿(紀元前6世紀)があって、多色テラコッタ製の屋根は頻繁に葺き替えられていました。博物館には当時の瓦が展示されています。
神殿の平面図と円柱の様式は純粋なギリシアのドリス式を踏襲しながらも、カンパーニア地方の伝統も組み込まれ適応しています。
オスク語の碑文から、この神殿が女神アテナに捧げられていたことが判り、粘土製の装飾や、丸彫りの彫刻、レリーフや瓦端飾りなどから、アテナとエルコレの結びつきが窺がえます。アポロンの聖域と共に(参照ページ83)町の聖域の両極を形成し、市民の一体化、社会規律の保持の場所でもありました。
発掘時期:18世紀以降

サンニウム人の体育場

献辞に刻まれた内容から、ポンペイがサンニウム人たちの町だった時代(前2世紀)、ローマ以前に造られたことが判っているため、“サンニウムの体育場”と呼ばれています。凝灰岩の円柱の並ぶ柱廊は、もとは中央の中庭を完全に囲んでいましたが、近くのイシス神殿を修復した折に、東側の部分は取り壊されました。短い柱廊の中央には基台があって、授賞式やセレモニーに使われていました。
ギリシアの規範によれば、運動場は男性と青年の鍛錬の場でした。運動場の中庭にある扉は競走用のトラックがあった三角形のフォロに通じていました。この建物における競技-軍隊的な一面を示すものとして、ポンペイの市民が中庭に置いていた大理石の彫像があります。現在はナポリの考古学博物館に保存されているこの彫刻は、「ドリフォロ」(槍を持つ人)と呼ばれる、紀元前5世紀のギリシアの有名な彫刻家ポリクレイトスの作品を大理石で忠実に複製したものです。
発掘時期：1768; 1796-1798.

大劇場

大劇場は、中央のすり鉢部分のために丘の自然な傾斜を利用して建設されました。ドーム型ヴォールトの上に置かれた階段席は通路によって3つのゾーンに分けられ、それぞれが5つの区画に分けられていました。
建設の時期は紀元前2世紀の中頃で、
後にローマ人の好みに合わせて、大きな変更が加えられています。数少ない記録のうち、東側の出入り用通路の入り口に残された碑文にはアルキテクトゥス(建築家)の名マルクス・アルトリウス・プリムスがアウグストゥスの時代に工事を担当したことが記されています。
その工事の内容は、舞台装置とステージ関係、ヴェラリウムと呼ばれる暑い日の日よけのヴェール、座席の番号付けに関するものでした。この劇場では伝統的なギリシア-ローマの喜劇や悲劇が上演されていました。
また、この劇場は公共建築の中では最初に完全に発掘された建物です。
発掘時期：1764-1765; 1767-1769; 1773; 1789; 1791-1794; 1902; 1951.

劇場のクアドリポルティコまたは剣闘士の兵舎

大劇場の舞台裏には(参照ページ 113)ノチェーラ産の灰色の凝灰岩でできた74本のドリス式円柱を巡らせた大きなクアドリポルティコのフォイエ(ロビー)があって、休憩時間には観客がくつろげるようになっていました。
紀元62年に起きた地震の後で、この建物の一部を再整備して、剣闘士たちの兵舎として使うようになりました。東側にはより重要な部屋が並び、おそらくは上の階には剣闘士たちのショーの興行主の住まいがあったものと思われます。二つの木製の箱の中からは、試合に先立って行われるパレードに使われた様々な武器や武具が発見されました。品物は現在はナポリの考古学博物館に保存されています。この場所からはたくさんの犠牲者が発見されました。そのうち4体の奴隷の石膏型は石の台の近くに置かれています。また、部屋の一つでは18人もが亡くなっていて、そのうちの一人は高価な宝石類を身に着けた女性でした。
発掘時期: 1766-1769; 1771; 1792-1795.

小劇場-オデイオン

銘文によると、オデイオンあるいはテアトルム・テクトゥムとローマ人から呼ばれていたこの劇場は、ポンペイがローマの傘下に入ってすぐの時期(紀元前79年)に、地元の行政官であったマルクス・ポルシウスとカイウス・クインクトゥス・ヴァルガスの希望で建設されました。この二人は円形劇場の建設も指示しています。この劇場では当時の流行だった無言劇が上演されたほか、音楽会にも利用されていました。建物には様々な色の大理石で豊富な装飾が施され、凝灰岩でできた大きな男性像(テラモニ)が階段を支えていました。また、音響効果を高めるために、天井部分は屋根で完全に覆われていました。外側の壁には見物人たちの残した書き込みが数多く残り、中にはかなり遠い地域からやって来た者もいました。
発掘時期: 1769; 1792-1795.

エスクラピウスまたはメイリキオのジュピターの神殿

ポンペイの信仰施設の中では一番小さく、発掘当初からここに祀られていた神について論議を呼びました。オスク語で書かれた記録によれば、この神殿は冥界に属するメイリキオ(蜜のように甘い、の意)のジュピターに捧げられ、通常その礼拝所は町の中心からは離れたところにありました。
より可能性が高いのは、医学の庇護者アスクレピウスを祭った神殿という説で、ここで発見されたテラコッタの構造と医薬箱のうち像の方はナポリの考古学博物館に保存されています。
中庭の中央には凝灰岩でできた祭壇があって、急な階段を上ると正面に4本、側面に2本づつの円柱が並んだ神殿が建っています。コリント式の柱頭には髭面の男性の頭部が装飾に組み込まれています。聖像安置室の中にはアスクレピウスとヒュギエイアの像を祀る台座がありました。
神殿の建設時期は、紀元前3から2世紀の間と推測されます。
発掘時期：1766-1798; 1869; 1940.

イシス神殿

発掘された当時、イシス神殿は装飾や備品がほとんど当時のままに残っていて、その姿はポンペイを世界中に知らせるのに貢献しました。
イシス信仰はエジプト起源の非常に古い女神信仰で、紀元前3世紀頃から地中海全域に広まり、信者だけに限定された秘儀信仰でした。
神話によれば、イシスはセトによって殺され解体された夫オシリスの遺体の断片を集め、魔法のような技で再度繋ぎ合わせて命を与えたことから、生命を支配する女神となりました。
死後の世界で生き続けるという希望から、イシス信仰は、とりわけポンペイの下層民の間に広く普及していました。
柱廊で囲まれた中庭の中央に、高い基壇の上に建つ神殿があり、その手前の空間には祭壇、供物を置くための溝、(プルガトリウム)と呼ばれる小さな建物が見られます。プルガトリウムの内部の階段を上ると、ナイル川から直接運ばれたとされる水を湛えた水盤がありました。神殿の後ろ側には、信者たちが集まりを持った広いホール(エクレシアステリオン)があり、より小さな(サクラリウム)にはイシス女神の神話のエピソードを描いた絵画が残されていました。
モーツァルトは1770年に父親のレオポルドと共にここを訪れて大きな感銘を受け、その印象をもとに1791年にウィーンで初演された「魔笛」の筋書きを構想しました。
神殿を飾っていた彫刻や付属品は、ナポリの考古学博物館に展示されています。
発掘時期: 1764; 1958-1959 e 1988-1991.

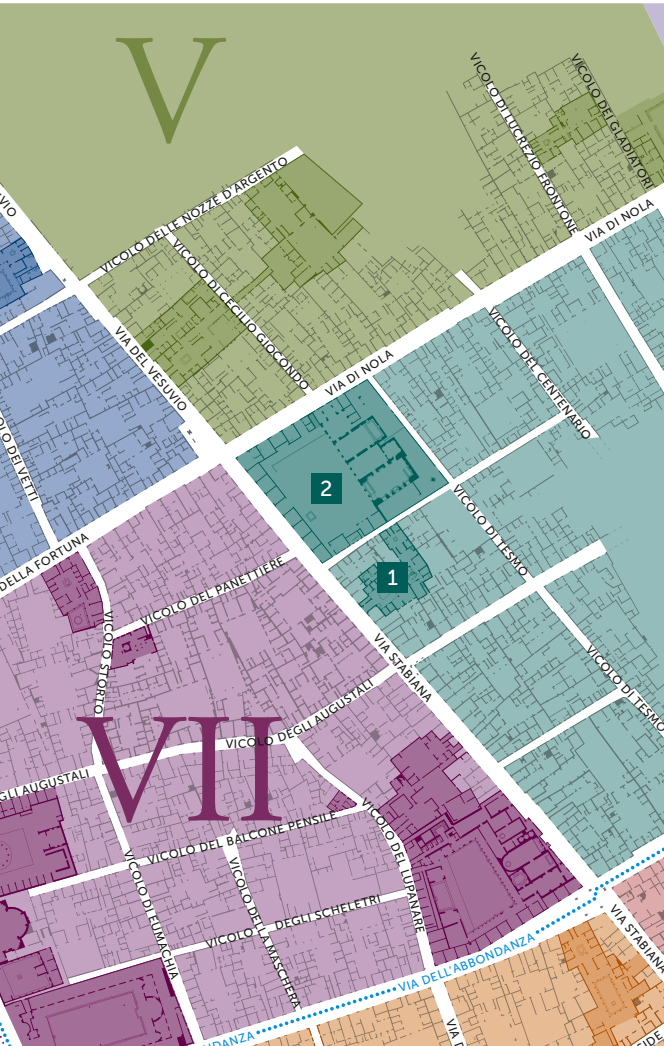
コルネリイイの家

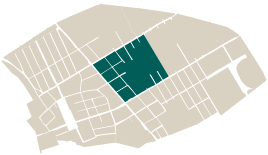
ドムス・コルネリア

スタビアナ通りに面したこの家の平面図は規則的で、アトリウムの中央に大理石製のインプルヴィオがあり、かつてはその脇に獅子の脚を持つ優美なテーブルが配されていました。その情景は19世紀に描かれた多くの絵画に見ることができます。この完全な彫刻による室内装飾の例(現在はフォロの穀物倉に展示)は、当時の旅行者たちにとって必見の場所でした。家の後方にはドリス式の円柱のあるペリスティリウムが残っています。当時アトリウムの鎧戸近くに置かれていたカイウス・コルネリウス・ルフスの胸像は、現在アンティクアリウム(ポンペイ付属博物館)に展示されています。
発掘時期: 1766; 1855-1856; 1861-1863; 1893.

Regio IX

1 スタビアナ通りのマルコ・ルクレツィオの家 122
2 中央の浴場 123
3 オベリオ・フィルモの家 124
4 ジュリオ・ポリビオの家 125
5 貞節な愛人のインスラ 126





VIA DI NOLA
III
3
IX
4
5
VIA DELL'ABBONDANZA
Casina dell'Aquila
VICOLO DELLA NAVE EUROPA
VICOLO DEL FUGGIAS
VICOLO DELL'EFEBO
VICOLO DI PAQUIUS PROCULUS
VIA DI CASTRICIO
VICOLO DEL MENANDRO
I

スタビアナ通りのマルコ・ルクレツィオの家

ドムス・M.ルクレツィ

平面図から明らかなように、もとは二つの住宅であったものを一つにまとめたもので、床面の高さの異なる二つのアトリウムが直角に配置される結果となっています。
アトリウムの開放空間に残る壁画はよい仕上がりで、ポンペイ最後の時期の作品と推定され、その一部はナポリの考古学博物館に展示されています。
この家で注目に値するのは小さな庭園で、アトリウムより一段高い位置に造られ、シレノスを形どった彫刻から湧き出る水が、入念に装飾された大理石製の優雅な滝状の噴水に落ちるように工夫されています。庭園では、円形の池の周りに4つのヘルメス柱像とErotiとシレノスのサイズの異なった大理石の彫像が配されていました。家の名前は筆記具をモチーフにした小さな絵に由来し、その中にはポンペイの参事会員でマルス神の祭祀であったマルコ・ルクレツィオに宛てられた手紙も描かれています。
発掘時期：1846-1845; 1851; 2002-2005.

中央の浴場

ポンペイの町で最大の浴場施設で、区域IXの一区画を完全に占めています。噴火が起きた時にはまだ建設中で、ローマで造られたネロ帝の浴場など、新しい施設に採用された新技術が用いられていました。その素晴らしさはネロの批判者であったマルツィアーレも認めたほどで、皮肉を込めてこう書き残しています。"ネロよりひどいものがあるか? ネロの浴場より優れたものはあるか?" 噴火によって工事は未完のままに残されましたが、中庭に面した正面にはこのプロジェクトの野心的な目標が見て取れます。
各浴室は、ポンペイの他の浴場のものよりはるかに広く、また明るく作られていました。
一方、女性とと男性の区域の仕切りがなく、おそらくは時間帯で男女交代で使用する計画であったと思われます。
発掘時期: 1817; 1836; 1877-1878.

オベリオ・フィルモの家

ポンペイで最も大きく複雑な構成の住宅の一つで、正面だけでもこの区画の短い一辺を完全に占領しています。内部には二つのアトリウムと一つのペリスティリウムが見られます。凝灰岩製のコリント式円柱を持つ最初のアトリウムは堂々とした壮大な造りで、そこに置かれた洗練された調度からは所有者の豊かさが覗えます。これら調度品には、獅子の脚で支えられた大理石製のテーブルやこれも大理石で作られたサテュロスの像を載せていた溝彫のある台座、噴水の水を集める水受けなどが含まれていました。アトリウムの右側には、発掘の際に見つかった鉄の板で覆われた木製の金庫が置かれています。
ドリス式の円柱があるもう一つのアトリウムは、日常の生活空間や台所浴室などの施設が囲んでいました。
この家の建設時期はローマ時代に先立ち、所有者の一族は高い階層に属していました。噴火の前にこの家に住んでいたのが、当時第一線で政治活動をしていたオベリイ一族であるかどうかは定かではありません。
発掘時期：1888; 1903; 1910-1911.

ジュリオ・ポリビオの家

簡素な正面のこの建物は中期サンニウム時代(紀元前3-2世紀)の貴重な住宅例で、ポンペイの他の住居に比べて異なった図面を呈しています。アトリウムに続く空間は、もとからあった家の戸口を塗り込めた上に描かれただまし扉で閉じられています。
この扉の近くには石灰が積まれていて、噴火が起きた時点で改装工事が進行中だったことを物語っています。トリクリニオには、彫刻作品のテーマにもよく取り上げられた、「牡牛に縛られたディルチェ???の責め苦」を題材にした大きなフレスコ画が保存されています。家の主が客人に示したかった己の豊かさと趣味の良さは、ここから発見されたブロンズ製のアポロン像や神話の題材が描かれた壺、紀元前5世紀に遡る骨董品の銅製の水差しなどの品々によって垣間見ることができます。
発掘時期：1912-1913; 1964-1970.

貞節な愛人のインスラ

このインスラ(街区)は複数の住居と一つのパン屋で構成されています。最近まで発掘の対象地区でしたが、まだ全体の調査は完了していません。79年に起こった噴火の時には
修復の作業が行われていた最中でした。突然の大惨事で中断されたままになった水道の工事と「仕事中の画家の家」にある大きな空間に残された、フレスコ画の顔料を乗せる前の下書きから、おそらくは噴火の数日前に起こった地震の被害に対処していたものと想像されます。
このインスラの名前は、トリクリニオに描かれた三つの季節の饗宴のうち、夏の場面にある二人の恋人たちの切なげな接吻のシーンから取られています。パン屋に隣接した家畜小屋からは、石臼の腕木を回したりパン作りに必要な小麦を運ぶのに使われたラバの骨が見つかりました。
発掘時期：1912; 1982-2010.

用語解説

アトリウム：道路から入り口を入ると通路によって結ばれていた広い空間で、周囲には重油な部屋が配置されていました。古い時代には家の心臓部の役割を果たしましたが、その後日常生活の中心が柱廊のある中庭ペリスティリウムに移ると、アトリウムは家の顔としての機能を持つようになりました。

コンプルヴィオ：アトリウムの天井に開けられた開口部で、家の内部の採光と換気のもとでした。傾斜した屋根の勾配によって、雨水は下にあるインプルヴィオに集められ、そこから更に下に造られた井戸へと移されました。

寝室：ラテン語のクビクルムから派生し、寝室を意味します。冬の期間中、暖房がしやすいように、ふつうは小さめに作られていました。

ドゥオヴィロ：ローマの植民地、下っては中世の自由都市における、最も高い位の行政官を指します。ラテン語のドゥムヴィルが示すように、二人の行政官から構成され、任期は一年で政治的・行政的な任務を遂行しました。

ニッチ、壁龕：ラテン語のアエデスの縮小形で、神の家を意味しました。公私の宗教的な礼拝に用いられ、神殿の特徴を備えた壁龕からなり、円柱で支えられたティンパヌムがあり木製の扉を備えている場合もありました。内部には家の守護神たちの小さな像が納められていました。ラルとペナテス
一般的には併せてラル神と呼ばれていました。

エクセドラ アトリウムの前または近くに位置するホールで、ペリスティリウムに向かって開き、移動の可能な椅子が置かれていて、寛いだり会話を楽しんだりする場所でした。しばしばアプシス(半円形の奥室)を備えていました。

エウピロ：ギリシア語で“狭い”を意味します。ローマでは、観客を猛獣から守るためにカエサルがチルコ・マッシモのアレーナの周囲に掘らせた水路のことを指しました。この言葉は庭園の噴水にも流用されるようになり、建築や彫刻が配された細長い水路を指すようになりました。最も有名なのは、ティヴォリのハドリアヌス帝のヴィラにあるカノプスの庭園の池の例です。

火山性砕屑物の噴出およそ500度の高温に達する熱い雲状の噴出物で、固形物(砕石、軽石、火山礫)とガス状の物質（水蒸気、二酸化及び一酸化炭素）が混ざっています。ヴェスヴィオ火山の典型的な初期噴火の形態で、流出物が速い速度(時速およそ80km)で斜面を流れ落ち、途中にあるものをすべて破壊しつくします。

半円筒ヴォールト、筒形円天井：建築用語で公共の通行に利用されたアーチ形の大きな開口部、またはアーチ形の天井を持つ建築部分(凱旋門や名誉の門、公共の門、水道橋、円形劇場や劇場の出入り口など)を指します。

グリフィン：ライオンの胴体と鷲の頭部を持つ伝説上の動物です。アポロ神の供であり配下とされています。

地下室、地下埋葬室：地下にある自然の、または造られた部屋で、居住空間、埋葬、信仰の場所などとして使用されました。

奴隷から解放された自由民：奴隷解放の儀式を経て自由になったもと奴隷を指します。もとの主の属質と第一名を取得し、その主に対して忠誠の義務を負いました。

インプルヴィオ アトリウムに設けられ、コンプルヴィオからの雨水を受けるための四角形の水槽で、その下には貯水槽が造られました。

ラル神の祭壇 各家庭や公共の場所を守護していたラル神の小像を祀った壁龕を指します。家庭内の礼拝では、ラル神は先祖たち(一族のラルたち)を示し、短い上着と長い靴を付けた若者の姿で表現され、これらの像にリトン(角の形をした杯)から葡萄酒を捧げました。何か重要な出来事が家にあると必ず、例えば成人に達したり、旅に出たり、誰かが帰ってきたり、婚姻が決まったり、子供が生まれたりする度に、ラル神に向かって生贄と供物が捧げられました。

オエクス：ローマ時代の住居では最も重要な空間で、トリクリニオと同様、しばしば饗宴に用いられました。贅沢が普及すると家の造りも次第に華美になり、円柱が高い天井を支えるようになりました。オエクス・テトラスティロは4本の円柱を持ち、コリント様式では側面の2列の柱が心労を形成していました。エジプト様式では、形はコリント様式とほぼ同じですが、天井はそれより低く、明り取りの開口部が付けられていました。

オスクはサンニウム人の他、イタリア中部のアペニン山脈の両側、サビーナからルカニアにわたる地域で使われていた言語でした。

ペリスティリウム 柱廊で囲まれた中庭のことを指します。ギリシア起源の優雅なペリスティリウムのタイプが“ロードス式”と呼ばれるモデルで、北側の柱廊が他よりも奥まって高い位置に造られていました。

ポディウム、基壇：神殿を載せるための高く造られた台座の部分で、神聖な建物を地面から分離し、同時に重要性を増す効果がありました。

サンニウム人：サベッリとも呼ばれ、現在のカンパニア州東北部、プーリア州の上部、モリーゼ州の殆ど、アブルッツォ州の下部とルカニア(バジリカータの古名)上

部を含む広大なサンニオ地方に定住していた部族でした。ローマが入って来るまで、ポンペイはサンニウム人の都市でした。紀元前4世紀を通じて、次第にローマとの接触を強め、ローマは軍事力を使って50年にわたる戦争の末、ポンペイを手中に収めました。ポンペイに残る紀元前1世紀の銘文から明らかなように、ローマの時代になってからも彼らはオスク語を使っていました。

セクティレ：オプス・セクティレは、床面や壁に用いられ、使用される材料(通常は豪華な大理石)の点でも、高度な施工技術の点でも、最も洗練された装飾技術でした。事実、大理石は多色の象眼模様を構成するために。薄板にカットする必要がありました。この技術はローマ帝国の全時代を通じて西洋で用いられ、その後は東方でビザンチンの聖堂建設に利用されました。

SUBURBIOはラテン語のスブ(下の意)とウルブス(都市の意)に由来する単語です。都市を囲む外壁のすぐ外にある空間を指していました。

タブリウム：アトリウムを挟んで家の入り口の反対側にある部屋で、ペリスティリウムとアトリウムを区切っています。家の中心的な空間で、主のオフィスで、客を迎える場所でもありました。もとは主人の寝室として使われていました。

テラモン、男像柱：男性像を丸彫りまたは高肉彫りした柱で、支えや骨組みの一部として、あるいは純粋に装飾目的で円柱やその他の建築パーツの代わりに用いられました。

観覧席、スタンド：トリブーニ(行政官たち)が演説をした演壇に語源があります。ローマのバジリカ(会堂)で、行政官たちが審理の際に占めた場所を指します。

トリクリニオ、横臥食卓：ローマの住宅に見られた食堂で、そこに置かれていた3つの寝台を意味する言葉がもととなっています。家の主と招待された客は部屋の三方に置かれた寝台の上に三人づつ横たわり、最後の一方は給仕のために空けてありました。一般的には、この空間は庭園に向かって開放されていて、客が緑の眺めを楽しめるように配慮されていました。

ヴィリダリウム、貴族の家の中庭：ローマの住宅に見られる庭園で、しばしば彫像や噴水による装飾が施されていました。この庭はペリスティリウムの中央に置かれるのが普通でした。

アルファベット順索引

アーチ(名誉のA.)　88ページ
アウグスタ
　A.の平和の柱廊(エウマキアの建物)　94ページ
　フォルトゥーナ・A.の神殿　90ページ
アウグスティ
　ジェニウス・A.の神殿(ヴェスパシアヌスの神殿)　93ページ
アキレス(アキレスのラル神の家)　17ページ
アクアエ(カステッルム・A.)　69ページ
アテナ(ドリス式神殿―A.とエルコレの聖域)　111ページ
アドーネ(傷ついたアドーネの家)　64ページ
アペルト(解放された又は夏のトリクリニオの家)　36ページ
アポロ
　A.の家　72ページ
　A.の神殿　83ページ
アマンティ(貞節な愛人の家)　126ページ
アモリーニ(黄金の天使の家)　67ページ
アラ(A.マクシマの家)　68ページ
アルジェント(銀婚式の家)　50ページ
アンコラ(錨の家)　57ページ
アンティカ(古代の狩りの家)　99ページ
アンフィテアトロ(円形劇場)　34ページ

イシス(I.の神殿)　117ページ
インスラ(貞節な愛人のI.)　126ページ

ヴァレンテ(トレビオ・V.の家)　42ページ
ヴィーナス
　貝のヴィーナスの家　31ページ
ヴィーナスの神殿　104ページ
ヴィラ
　ディオメデスのV.　76ページ
　秘儀荘　77ページ
ヴェスヴィオ(V.門のネクロポリス)　52ページ
ヴェスパシアーノ
　ジェニウス・アウグスティの神殿(ヴェスパシアヌスの神殿)　93ページ
ヴェッティイ(V.兄弟の家)　66ページ
ヴェトゥティウス(V.プラチドゥスの家とテルモポリウム)　23ページ

エウマキア

　アウグストの調和の柱廊(E.の建物)　94ページ
エウロパ(船E.号の家)　25ページ
エスクラピオ(E.の神殿又はメイリキオのジュピターの神殿)
　　116ページ
エスティーヴォ(解放された又はE.のトリクリニオの家)　36ページ
エフェボ(E.の家)　22ページ
エルコラーノ
　E.門と外壁　74ページ
　E.門のネクロポリス(墓地)　75ページ
エルコレ(E.の庭園の家)　37ページ
エルコレ(ドリス式神殿ーアテナとE.の聖域)　111ページ

オーロ(マルコ・ファビオ・ルフォとO.の腕輪の家)　100ページ
オクタヴィウス(O.クアルティオの家)　30ページ
オステリア(剣闘士のO.)　26ページ
オデオン(O.ー小劇場)　115ページ
オベリオ(O.フィルモの家)　124ページ
オルト(フッジャスキのO.)　27ページ

カスカ(カスカ・ロングス又は演劇モチーフの小絵画の家)　15ページ
カスティ(貞節な愛人の家)　126ページ
カステッルム(C.アクアエ)　69ページ
カゼルマ(兵舎)
　剣闘士のC.　48ページ
　C.の兵舎又は劇場のクアドリポルティコ　114ページ
カッチャ(古代の狩りの家)　99ページ

キルルゴ(外科医の家)　73ページ

クアドリポルティコ(中庭の柱廊)
　(劇場のクアドリポルティコ又は剣闘士の兵舎)　114ページ
クアルティオ(オクタヴィウス・Q.の家)　30ページ
クビーコリ(果樹園又は草花装飾の寝室の家)　24ページ
グラディアトーリ(剣闘士)
　G.の兵舎　48ページ
　クアドリポルティコの劇場又はG.の兵舎　114ページ
グラディアトーレ(G.のオステリア)　26ページ
グラナイ(フォロのG.)　86ページ

アルファベット順索引

グランデ
　大体育場　35ページ
　大劇場　113ページ
クリプトポルティコ(C.の家)　18ページ
クワドレッティ(小絵画)
　(カスカ・ロングス又は演劇モチーフの小絵画の家)　15ページ

コミティウム(C.と市庁舎)　106ページ
コルネッリ(C.の家)　118ページ
コンキリア(貝のビーナスの家)　31ページ
コンコルディア)
　C.アウグスタの柱廊(エウマキアの建物)　94ページ

サルスティオ(S.の家)　63ページ
サントゥアリオ(聖域)　(23)
　アポロのS.　83ページ
　ヴィーナスのS.　104ページ
　サントゥアリオ(公共のラル神のS.)　92ページ
　ドリス式神殿―アテナとエルコレのS.　111ページ
サンニウム(サンニウム人の体育場)　112ページ

ジェオメトリチ(幾何学模様の家)　108ページ
ジェニウス
　G.アウグスティの神殿(ヴェスパシアヌスの神殿)　93ページ
ジャルディーノ(エルコレのG.の家)　37ページ
シャンピオネット(C.の家)　107ページ
ジュピター
　G.の神殿　87ページ
　エスクラピオ又はメイリキオのG.の神殿　116ページ
ジュリア(G.フェリーチェのプラエデア)　32ページ
ジュリオ(G.ポリビオの家)　125ページ
ジョコンド(チェチリオ・G.の家)　51ページ
シリクスの家　97ページ
シリコ(S.の家)　96ページ

スタビアーナ(S.通りのマルコ・ルクレツィオの家)　122ページ
スタビアーネ(スタビアーネ浴場)　95ページ
ステファヌス(S.のフォッロニカ)　16ページ

スブルバーネ(郊外の浴場)　16ページ

チェイイ(C.の家)　19ページ
チェチリオ(C.ジョコンドの家)　51ページ
チェントラーリ(中央の浴場)　123ページ
チタリスタ(チェトラ奏者の家)　14ページ
テアトラーリ
　(カスカ・ロングス又は演劇モチーフの小絵画の家)　15ページ
テアトロ
　大劇場　113ページ
　小劇場―オデオン　115ページ
テアトロ(劇場)
　(劇場のクアドリポルティコ又は剣闘士の兵舎)　114ページ
ディオスクーリ(D.の家)　65ページ
ディオメデス(D.のヴィラ)　76ページ
テルメ(浴場)
　スタビアーネのT.　95ページ
　フォロのT.　89ページ
　中央のT.　123ページ
　郊外のT.　60ページ
テルモポリウム(食堂)　60ページ
　ヴェトゥティウス・プラチドゥスの家とT.　23ページ
テンピオ(神殿)
　イシスのT.　117ページ
　エスクラピオ又はメイリキオのジュピターのT.　116ページ
　ジェニウス・アウグスティのT.　93ページ
　ジュピターのT.　87ページ
　ドリス式T.―アテナとエルコレの聖域　111ページ
　フォルトゥーナ・アウグスタのT.　90ページ

ドラーティ(黄金のキューピッドの家)　67ページ
トラジコ(悲劇詩人の家)　59ページ
トリアンゴラーレ(三角のフォロ)　110ページ
トリクリニオ(解放された又は夏のトリクリニオの家)　36ページ
ドリス(D.式神殿ーアテナとエルコレの聖域)　111ページ
トレビオ(T.ヴァレンテの家)　42ページ

ナーヴェ(船エウロパ号の家)　25ページ
ナポリ(N.王子の家)　70ページ

アルファベット順索引

ネクロポリス(墓地)
　ヴェスヴィオ門のN.　52ページ
　エルコラーノ門のN.　75ページ
　ノーラ門のN.　45ページ
　ノチェーラ門のN.　39ページ

ノーラ
　N.門と外壁　44ページ
　N.門のネクロポリス　45ページ
ノチェーラ
　N.門と外壁　38ページ
　N.門のネクロポリス　39ページ
ノッツェ(銀婚式の家)　50ページ

パクイウス(P.プロクルスの家)　21ページ
バジリカ 105ページ
パニフィーチョ(ポピディオ・プリスコのパン屋)　98ページ
パレーティ(赤い壁の家)　109ページ
パレストラ(体育場)
　サンニウム人のP.　112ページ
　大きいP.(大体育場)　35ページ
パンサ(P.の家)　61ページ

ピッコラ(小さい噴水の家)　58ページ
ピッコロ(小劇場―オデオン)　115ページ

ファウノ(F.の家)　56ページ
ファビオ(マルコ・F.ルフォと黄金の腕環の家)　100ページ
フィルモ(オベリオ・F.の家)　124ページ
フェリーチェ(ジュリア・F.のプラエデア)　32ページ
フェリート(傷ついたアドニスの家)　64ページ
フォルトゥーナ(F.アウグスタの神殿)　90ページ
フォルノ(竈の家)　62ページ
フォロ 84ページ
　F.の浴場　89ページ
　F.の穀物倉庫　86ページ
　F.ボアーリオ　33ページ
　三角のF.　110ページ

フォンターナ(小噴水の家)　58ページ
フッジャスキ(フッジャスキの菜園)　27ページ
フッロニカ(ステファヌスのF.)　16ページ
プブリチ(公共のラル神の聖域)　92ページ
プラエディア(ジュリア・フェリーチェのP.)　32ページ
プラチドゥス(ヴェトゥティウス・P.の家とテルモポリウム)　23ページ
ブラッチャーレ(マルコ・ファビオ・ルフォと黄金の腕環の家)　100ページ
プリスコ(ポピディオ・P.のパン屋)　98ページ
プリンチペ(ナポリ王子の家)　70ページ
フルッテート(F.又は草花装飾の寝室の家)　24ページ
プロクルス(パクイウス・P.の家)　21ページ
フロレアーリ(果樹園又はF.の寝室の家)　24ページ
フロントーネ(マルコ・ルクレツィオ・F.の家)　49ページ

ボアーリオ(フォロ・B.)　33ページ
ポエタ(悲劇詩人の家)　59ページ
ポピディオ(P.プリスコのパン屋)　98ページ
ポリビオ(ジュリオ・P.の家)　125ページ
ポルタ(門)
　ヴェスヴィオP.のネクロポリス　52ページ
　エルコラーノP.と外壁　74ページ
　エルコラーノP.のネクロポリス　75ページ
　ノーラP.と外壁　44ページ
　ノーラP.のネクロポリス　45ページ
　ノチェーラP.と外壁　38ページ
　ノチェーラP.のネクロポリス　39ページ
　マリーナP.と外壁　81ページ
ポルティコ(柱廊)
　アウグストの調和のP.(エウマキアの建物)　94ページ
ポンデラリア(計量台)　85ページ

マチェルム　91ページ
マッシマ(アラ・M.の家)　68ページ
マリーナ(M.門と外壁)　81ページ
マリナイオ(M.の家)　82ページ
マルコ
　M.ファビオ・ルフォと黄金の腕環の家　100ページ
　M.ルクレツィオ・フロントーネの家　49ページ
　スタビアネ通りのM.ルクレツィオの家　122ページ

ミステリ(秘儀荘)　77ページ

メイリキオ(エスクラピオ又はM.のジュピターの神殿)　116ページ
メナンドロ(M.の家)　20ページ
メレアグロ(M.の家)　71ページ
メンサ(計量台)　85ページ

モザイク(幾何学模様のM.の家)　108ページ
モラリスト(M.の家)　43ページ

ララリオ(アキレスのL.の家)　17ページ
ラル(公共のラル神の聖域)　92ページ

ルクレツィオ
　スタビアーナ通りのマルコ・L.の家　122ページ
　マルコ・L.フロントーネの家　49ページ

ロッソ(赤い壁の家)　109ページ
ロングス
　カスカ・L.又は演劇モチーフの小絵画の家　15ページ

ポンペイ遺跡見学のルール

ポンペイの考古学地区は延べ面積およそ44ヘクタールに及び、そのうち約22ヘクタールが見学可能となっています。遺跡内の歩行面はその性格上不規則ですので、見学中の移動では怪我等の事故が起きないよう充分に注意してください。見学中の事故に対して、文化財保護局では責任を負いかねます。
ヴェスヴィオ地区の考古学エリアでは立法府法令 81/08 に定められた規定が文化財保護規則（立法府法令 42/2004)に従って適用されます。

以下に、遺跡訪問に際しての幾つかの情報と勧告が記されています。

入口
遺跡エリアにはマリーナ門、エセドラ広場、円形劇場の広場の3か所に出入り口があります。
チケット販売所は3つの出入り口に隣接してあります。
学校の生徒たちの入場は、円形劇場の近くにある入口からとなっています。
秘儀荘にある通用口は出口専用です。

手荷物預かり
大きさが 30 x 30 x 15 cm.を超えるバッグ、リュック、カバン、ケースなどを遺跡内に持ち込むことはできません。
学生やツアーのグループでは、リュック等をバスに残して見学するようお願いします。
荷物預かりは遺跡の3つの入り口で実施しています。

ガイドによる案内サービス
ガイド付きの見学を希望する場合にはマリーナ門にあるガイド詰め所(案内所と同じ場所)、またはエセドラ広場で、9時から14時まで申し込むことができます。
ガイド・サービスは文化財保護局の管理下ではありませんが、カンパニア州の認可のある有資格ガイドが行い、州が発行した証明証を携帯しています。

ピクニックと食事のエリア
食事の際には遺跡内のフォロ近くにある飲食エリアか、円形劇場または鷲の家に隣接したピクニック・エリアをご利用ください。

医務室
フォロの近くには救急サービスが常設されています。Telefono 081 8575404-406

フォトとビデオの撮影
個人的な利用を目的とする場合に限り、写真と映像の撮影が許可されています。　フラッシュの使用は禁止されています。 三脚を用いた撮影や商業目的の撮影には、文化財保護局の特別な許可を必要とします。

勧告と禁止事項
身体機能に制限のある方、心臓や血管の疾病がある方は充分にご注意ください。 見学の際には、楽な靴を着用してください。　柵や制止の表示があるエリアへは絶対に入らないでください。
フレスコ画の壁面の近くではよく注意し、これに近寄らないようにしてください。また遺跡内の考古学的、建築学的な構造物によじ登ったり腰かけたりしないでください。 遺跡内では良識のある態度を取り、壁にいたずら書きをしたり、ゴミを専用の容器に捨てず、場内に放棄したりしないようにしてください。

喫煙の禁止
遺跡内での喫煙は固く禁じられています。喫煙ゾーンは鷲の家及び各トイレの近くに用意されています。

ペット
考古学地区には大型犬を連れて入ることはできません。 許可された動物も、必ず紐や鎖に繋ぎ、建物の中に入る際には腕に抱きかかえてください。
遺跡内で放置されている動物を見かけた場合は、近寄らないようにしてください。

注記

注記

注記

www.pompeiisites.org